古今よりこのかた　古八宗鑑中武
貞徳宗因ノ時代ヲサン　今八貞
享元禄ヲ云
面起スハ面目ヲ得ルナリ　拳白集ニ
月もはおりて　拙す　色よりなる
俳諧
幻術八即今吞刀吐火ノ類ナリ
千載集　恋の　ゆ　ま　松おもて
て　を　把　ゆ　の　ち　み　ゆ　め　を
見　ら　ま　れ　　差図
不変八不易ヲ云　変八流行ヲ云
五徳八五常ト云　又洪範ガ五事ノ
徳ニヤ　貌曰恭　言曰從　視曰聰　曰
聖思曰睿　又信徳ガ云八俳諧ノ五
徳ニヤ
骨ニテ今作リタテ　ト云八撰集抄
ノ古事ナリ

猪簑

晋其角序

俳諧の集つくるや　古今ふるきこと
ばをあつめて　新しきを尋ぬ
幻術の第一とす　その白玉楼の人
夢ゆめ　ゆめ　ゆめ　ゆめ　ゆめ
世よりこのかた　人を惑はすこと
の変を　ゆめ　五徳八　ゆめ
人をたぶらかす　ゆめ　ゆめ
彼西行上人の骨を　人を作り

五声ハアイウエオノ五音ナリ
反魂ハ方士ト家家ノ秘法ナリ
アイウエヲトアリ オニ改ム
響ハ附声如影之着形

此行御元徳二年ノ冬ナリ
神ハ変化之極妙万物而為詩不可
以形詰

斷腸ハ肝腸寸斷 謂ナリ
白氏文集猿過巫陽始斷腸
魂ハ陽神也魂入テヨウ天地ヲ
動カシ鬼神ヲ感ニルハノ妙ニ至ルハ
ケレ故ニ魂ノ字五ツ神ノ字ヲ合テ
文中ニ六アリ

あるべきにあらざる笛を吹やうは
なん侍らんとかや―されども人は成て
侍るとかや―五の音のねをば
反魂の法のおもむきにかなはれば
魂の入るべきハアイウエオよくつづけて
なるべし吹給へ―只御心
魂の入るべきにて我笛の術
の民仔賀殿―なるべし―さて猿
小童をもちて御心の神を入るべ
き給へるものなれば御心の神
なるに響きの幻術なりこれをも

私ニ文中ノ綱領ト設中ノ眼目ニ
小圓ヲカテ童蒙ニ示スコト蓋門
ノ正目様蒙ハ小亀鑑ナルモ
元禄癸未年月華者ノ一行
ノ故ニ首ニ其角序ト書ス然ニ
一帖ノ畳紙ヲ吉ミ後年書肆ノ
校去シモノヽ序ノミ蕉翁書ト
云ハ非ナリ
雲竹ノ林観玉蘭堂北向氏八郎左
衛門加茂藤水甲斐守敦直
門人祖翁京師遊学中入此門

元ちうて四集をつくりあつめて猿蓑とも
名付申されたる巻ニ序もその心を
魂を発もて古今九州の内にあるよ
やうのものを書

元禄辛未歳五月下浣　雲竹書

冬

初しぐれ猿も小蓑をほしげなり　芭蕉

たのもしきけさ時雨する板の縁の雫　其角

時雨きやあぶらひらめく鮒の腹　子那

蜑人の時雨かけぬく芳田の稲　伊賀　太草

綾織の粧飛鳥川ながれ　猛仏　正秀

廣澤や池ら去る沼太郎　史邦

舟人よぬれて乗ーー時雨哉　尚白

伊勢の境を入て

なつかしーやほゝの餅の一ーられ　曾良

七ノ字禽獸ヲ相兼テノ歎息ナリ

鮒正字鱗魚サイホリト云

廣澤洛外ナリ沼太郎諸説アレト詩經名物弁解ニモ湛ノ種ト云リ

なつかしーやハ神無月ーられ

なつかしーやハ神無月ーられ

なつかしーやハ神無月ーられ

なつかしーやハ神無月ーられ

なつかしーやハ神無月ーられ

なつかしーやハ神無月ーられ

なつかしーやハ神無月ーられ

なつかしーやハ神無月ーられ

なつかしーやハ神無月ーられ

なつかしーやハ神無月ーられ

なつかしーやハ神無月ーられ

なつかしーやハ神無月ーられ

なつかしーやハ神無月ーられ

なつかしーやハ神無月ーられ

なつかしーやハ神無月ーられ

なつかしーやハ神無月ーられ

なつかしーやハ神無月ーられ

なつかしーやハ神無月ーられ

なつかしーやハ神無月ーられ

笛山城より人丸ノ名ニ山城のふ情のすまるいまれとかちよりそやく丸をおもふ

劉元叔ガ芝斗星前横笛催ノ換骨ナリ

紙和言ノ不精ノ所行ノ如ナルヲトアリ御寮

志ゝゝゝ如星木つゝむ水の雲のうつる

かりて行田の星ーられ　丸兆

ゝゝゝゝれーー星の光ゝ染夜時雨　尾張　乙孔

新田ゝ稗穀ゝゝゝーーられ角　勝州　羽石

いを刈ーー沖の時雨の色帆ヶ帆　昌房

初雪ゝ行や北斗の星ゝ　玄来

一ゝゝ雪ゝゝ雪ゝ　伊賀　百歳

渡ゝて　砥水

初雪ゝ時をおゝゝ初の五　其角

降ゝ雪ゝ雪ゝ賀ん渡ゝ　同

降ゝ雪の松の葉ゝ沖ゝ年月　丸兆

栄白集に云く人々見て花石に云の名ゝ書きたるつゝみ出
地の文と

原本美聖聖八書損ナリ
美照女ハ龍居士ノ女常鬻竹
濯篠以供朝夕ニ傳燈録ニ
詳ナリ
歎息くるるなり

百モモスの実の熟する時の様ニ十月
この頃も類雑いろいろ人の新
竹ようけ琴のかゝとのみ変る
赤ゝとして
梅花のかゝちり残る牡丹ゝ
深林をたゝのあて白る十五夜
煮のむやむやとくさ重四女
菊生の菜のもゆるを折られる
ちるの蕎麦のまゝ〜ゝかゝ
菊の紅白家々をかゝて
雞冠の名ゝちゝ八ゝちり

芙蓉
芭蕉
凡兆

土芳
勝所 振道
越人
猿蓑
乙州

甚角

東海道草津駅の城の餅
ナリ

増山井ニ云ゝ駅ゝ名ゝ
十月前赤豆飯を用ゝ
うちこの一ハ云

江州犬上郡所答伊井諸尊ゝ
居ハ名ゝ宮駅ニアリ

らの宮ゝ牡丹ゝ花のゝ裸
草津

海ゝ見ゝ焼ゝ海のこゝ形
神ゝ人ゝ口ゝ多ゝ多ゝ所

車京
尚白
北枝

霜月歌仙

猫ゝ子ゝ子ゝ子ゝ子ゝ赤柏
ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ
ゝハ世ゝ世ゝ世ゝ世ゝ世ゝ世ゝ世ゝ
尾張ゝ国ゝ国ゝ国ゝ国ゝ国ゝ国ゝ国ゝ
一ゝ枝ゝ宮ゝ海ゝ弱ゝ年ゝ業
道ゝ通ゝ通ゝ通ゝ通ゝ通ゝ通ゝ通ゝ

良品
不玉
旦業
探丸
尚白

旅の空又旅をしてなほ旅
夢のうちまで夢をなるかな
又玉水集にうれすのうらはてあ
らく旅やうく住つきのうきす
すのみそはりる

古文前集三貧交行ノ文アリ

こゝ色八千島のもれて渦巻ヲ云

第獨をつめてきはまる磐ちかく　エト　鼠角
炭竈ふる屋の柱の例をうり　九州
住つの旅のこゝろや金こゝろ　芭蕉
あるこゝろや白髭蒲菖のぬけ　其角
つちのふるもをかふるもをかふる　凡兆
木兎やおもひわるる夜の面　芳境
みつつ八幡をさそこゝろ　半殘

貧交

きりぶくの切を濃ちり　丈草
浦風や巴をこゝをもちり衛　雪色
ぶら雑やちりぶたら夜ふる　去来

旅の行こゝ路ふる宮演ちとう　史邦
背門口のの沿ふの動るふる　丈草
いちこう雪ちかて明ちこう　ふ邪
矢田の野や浦のきれる鳥衛　凡地
義士の墓をこゝる路や鶴の中　木兎
ふ墓をこゝ鶴ふ鳥ふ野ふ　丈草
ふ芭蕉人ふ屋ふの寒吾の鳥　路通
ふ芭ふ操ちこう鶴の新　旦藁
樓ふ首引のこゝ月の月　杉風
キ木ふ鶴のされて年ふ月　其角
鶴鳥の蒲菖こゝ月ふの旅　十百年　暮年

原本柴の口ヨリ去来抄ニ先師曰其本ヨリ出板ヲ改ム

紙衾之記芭蕉文集ニアリ
衾褥ヲヨリ大被曰衾

元禄二年曾良奥州行脚ノ供セシ所此吟アリ

朦突ハ徒然草清士又五郎ガ
段ニ有リ半蔀ノ類ナリ

花やさそ一枝入やう石菖の
菊ヲ活ル器ヲ活ル器ヲ活ル記
活ル器ヲ

前ヲ出テ初雪ヲ見ル兄義　竹戸
鶴竹戸ノ義

雪国ハ我ヲノ知ラヌ蔵　曾良
魚ノ多キ粉ノヤウニ散ル　探丸
古つゝ我数ヲ数ヘヲ見ル　文草
清白ノ如ク候ヲ

蔀　実ヲ加ヘ候ヲ　史邦
援桐ノ葉ハ雪ヲ数ヲ　耶壷

家持ノ鶴橋ノ歌換骨ナリ

我妹子ヲ

去来抄菊ヲ活ル器ヲ活ル器ヲ活ル
ヲ活ル器ヲ極メタル句ト
アリ

穂屋ハ諏方郡洩射山諏方
ノ神事ナリ

散ノ梅ヲ見ル数ノ邪
咲ヲ見ル財貴ヲ見ル
ヲ見ル蔵ヲ見ル
初雪ヲ見ル
初雪ヲ見ル
初雪ヲ見ル
雪ヲ見ル
雪ヲ見ル

五元集ニ芭蕉空庵ヲ訪テトアリ
枯尾花ニ今年就中老衰ト
歎キおつり云〜
白氏文集香炉峯雪撥簾看

播州豊嶋郡ニ出塵ヨリ

空也上人ハ延喜帝第二皇子ト云
元亨釈書ニ釈光勝不言姓氏
もノ字ニツヲヽテ瘦ノ字ヲ相兼
ハト云

芋虎の面をそなへて
復読ハ蓮もなけれど虎の
雪の日ハ休るゑ笠をよそりくる
徒とても健るくハ雪の 孤
ひつかけて行や雪の下まくら

青亜追悼

氣香るゑ世を淋しくする師走ハ
から鮭も空や霜も空の
淋るくを悼い泉ゑれぬるゆう
一月ハ我ヨ果ゥを淋るくき

伊吉支純

甚角
羽笠
千七
古来

尚白
芭蕉
乙刀初
丈草

元録ニ年ノ暮五弧カ家ニ春ヲ
待玉フテ吟ナリ

弱法師ハ乞食ナリ

年ノ一夜ノ隔ヲ薄壁ニ比喩
セシナリ
貞享四年去来子ト伊賀能
野ニ行セシ事アリ

巻巻シナリ巻葉ハ
非ナリ

扶桑ヤ鼻息白〜面の白
巻巻ハ〜〜〜

面起スハ序ニ元面目アルヨリ
俗ニ外聞ヨキヨリ

奥州行脚ノ時那須野ノ吟心
[illegible]

いかゝとしの暮ぬれば
[illegible]

猿蓑集巻之二

夏

[illegible]

[illegible]

[illegible]

古文ノ遊子吟ノ慈母注ニ慈仁愛也故謂慈母妙務尼
墓在于麻布二本榎上行寺

四月八日慈母墓

ぜんまいの　ぬれぬれとして　牡丹の芽
　　其角
　　エト金峯

別僧

ちる時の　心やそれとも　米蘂も
　　ケシノハナ
　　越人
　　孤屋

智恵の光る人は　花をもけぶりの中
　　杜國
　　蕉葉
　　半殘

古郷を起出さるものゝ
ひやうきのかなるゝこゝロ
前書トス

豊國社山城愛宕郡ニアリ
文山詩三零落東山古廟鄙
ト作レリ

起出さるものゝ心をはかるこゝろ
　　仙化

題志賀ノ曙時雨橋金二句

豆腐屋の　畑も木枯　ものがれ
　　凡兆
　　吾亦

破堤や　ちりを庵の　西の方

南都旅店

浴歌の　ちからの声や　相洗
　　ふ那
　　ヲミリ蕉芝

洗濯や　きぬぬるもみぢ　柳の長

豊國社

休のるの　ちからの　ちりを　春
　　凡兆

休のるや　畠隣　ゑ　恵方
　　去来

照射ノ火半ハ夜ノ秋ノ

蝸壷ハ章魚ヲ取ル器ナリ
拾遺集ニ夜の秋ハ浦ゝ
ゆくてくらくらん
近江坂田郡筑ノ社四月朝日
神事ナリ

源氏須角ノ巻ノ面影方翁
曰物語ノ姿一集まいらせ
ものゝと

寛文四年ノ吟ナリ

芭蕉
西ノ秀

蝸壷や章魚ヲ取る海の秋
拾遺集ニ夜の秋ハ浦ゝ
ゆくてくらくらん

明石歌仙

蝸壷や章魚ヲ取る海の秋　芭蕉
夜の秋や筑摩ノ社の鍋ひとつ　越人

五月こるゝ蛍せるかなて
女松菅と葉くんでかけ蛍火　千角
稲妻ふたゝまもなき額髪　芭蕉
隠笠の廣葉くゝいゝ蜂稲　岩角
洪水ゝ人やとふ月の孔　尚白

五月こるゝ大坂付死の老ゝ年ゝ

大坂ノ尾口ニテ藤堂仁左衛門同
新七討死ス元和元年五月七
日也

蟬吟子ハ但翁ノ古主ナリ
高館ハ清衡基衡秀衡三
代ノ旧跡ナリ
万葉ニ廣火屋トアレトモ此句
蚕ノ飼屋ナルヘシ顕昭説ヲ
用ヒ玉ヒシカ其場ニヨルヘシ

源氏須ノ巻ニ明石の
ゝ
ゝ
ゝ

中将実方ハ長徳四年十二月
於任国卒

蓬屋やいつこ五月の雨うら　芭蕉

大和紀行の境ゝにて一句を結ぶ

末の松山をこゆる頃の名月哀れ
料足つくる銭の事より結ぶ

つくろもそなへ一句やゝ五月雨　支考

髪剃や一剃ゝ度精て五月雨　凡兆

日の長や養仙くさつきなのめ　芭蕉

料足ハ銭の事ナリ
つくろハ殺の延語ナリ
剃刀　和名抄ニ銭精
左傳ニ琴猫能衛其足又聯珠
詩格唯有芰花向日傾

五月雨　明紅

七十翁の名聞みやうにくさ
まるたゝとりてなくやこゑ
いとみの白色なるその名聞草
をかしし　時ゝさふ人を見れば人を
ひらきうたれ義をよ思ひ
して古来称する詩をよ
そうくるさうにれハ
六尺ゆ力拔しやゝ五月雨　其角
百姓も麦おとりつく業掃くゝ　支考
ちのふくを米山一うり夫婦連　西鶴

近江滋賀樂ノ里ナリ
輿下

杜律註三風流謂得前賢之流風遺俗
風流ノ始ハ陸奥ノ古風ノ遺俗ナリ
眉掃ハ化粧道具ナリ
法隆寺ハ大和南無仏ノ寺ハ聖徳太子ノ御像ノ

つくみたのふるけの麦畑　せ、　浴力
孫を愛して
麦藁の家でやしなる蛙　初月
麦ふみて鯉さくふゆ山ふかる　エト　茅紙
ちくりの舞ちえて
風流のそしらぬ奥の田植うた　芭蕉
出雨の宿とまりて
眉掃を面影うつして白粉の色　同
法隆寺南無南無仏の寺ぞ
拝ん
清涼のそられそらうしろ白粉の色　子形

鳴ノ海ノ間ナリ
ねぶりなれハ眠ノ来ナキリ
ハ鬼尾谷ハ熊野山中ニアリ

田の面ハ生てつゆ草ふる形　イカ　万乎
猫江曲水の橋まて
草庵ハ吹とそ流れて水のもと　去来
野田の草見二句
富の秋やまの仕法ハ草く丹
草見ハ秋江なれて月つゆ　丸北
草見ハ　芭蕉
之雄ハ清ふる時
草見ハ寒かるまハ鬼尾谷　ナカサキ　田上尼
たつかからまれ秋ふるなめ　尚白
まむしやる谷ハ中くかの夜　半残
病後

さつらハ逆上ヲ云リ

燒蚊辯ハ風俗文選ニアリ
万葉集三憶良等ハ今やまと
わらむとなくらむ子母も
為をアはなれ子ノ所ヲ云心

往者ハ家僕ヲ云

吉次ハ金書橘次信高ヨリ
稱者ハ若冠ノ称ヨリ高下者
五元集ハ夜の衣をミミ恨ベ
トアリ一直ニヤ
ト園やミミミ蟬の声ヲ
ント樂ヒ含メル句ナリ

ゆうりやかーらやらくる会の色　何必
涼風や糸ゆ先なる百会の色　乙弟

燒蚊辯を作りて

るや浅人甚るの母も蚊の蚤ん　嵐象

錢別

立ちやや蚊ともちまの弱の品　里東
うとう成人まつれて年まる往来

まをあけして

みーら秋色去次ヶ家去の名残ぶ　其角
陳ぶ秋君の出て行耳の宛　丈芝
下雪や地去ちるの蚊の涙　嵐雪

荘子ニ螻蛄不知春秋

舟引唄ニもこ浮ちく鬼ま
紙ちくれ赤い提ちるふの紙
てせとやつトアリ

甘泉賦ニ浮蟣蟻而撥天列
三蟻蚋トアリ　原本蟣誤字

ゆうやかは居にうる蚊のこえ　探雪
蚊ちて死ぬけーさいええ蚊のうえ　芭蕉
義ちれ青麻刈ら蚤の玉　槐市
落ちかけて藻の色聚く虫ふる　凡兆
井引の書の喝ちの初ちの色　子邦
白百や絶吟ちるけ口の夕　史邦

まふ巻ニ蕉池金

白百や蕉ニ枝の蚊ちる虫　嵐蕉
白蚊田や呼くつぶく作蛙　乙弟
白の行つき盥の底の蟣ちま　凡兆
ゆ雲白ち鼻つきなれ数寄屋　同

日の暮れ京ト大津ノ間一里塚ノ西ノ

竹ハ五十年ニシテ花咲実ヲ結ヒ其竹則枯トシ自然枯ト云　獲又獲

千子ハ去来ヵ妹元録元年ノ没古九ノシ

草朝ナリ一本浅ニ作ル誤ト

日の暮やこゆるまで暑き牛の舌　正秀
たく暑しゝ蘆よれい数の蔭　本筋
吉野山の義仏風をなつかしし　野坡
夕風よりそれてつゞき暑さ哉　雨考
暑さを酒入たゝんなつかふ　巴山

ゆるゝ身ちりにをすてこの玉
ゆう涼ゆるゝ下つゞき結ぶ　蕉
ちきんの少神も大やや土用干　蕉
あ世自やゆりこゆるゆきを　蕉
ちくらふ扇れい涼きゆ歌れ　京沢
すゝしさやゆ茶門しまゆの山　白地

十三

六月一日祇園ノ鉾ナリ

原ヨリ墨つく兒の涼しさ　不角
自然や兜の飾の蔭　曽良
夕暮や岷山ひくるこの暑　吉東
ちゆ兒て落よのて
雲の峯ゆの八比叡ゆ物ゆ　大サカ之通

猿蓑集巻之三

秋

秋風や蓮をちらふる蓮ひゝ　東読人
ちゆ東武ちきこゆもゝ蓮ゆ
かゝちとぬけ初る歯や秋の風　杉風

全昌寺ハ大聖寺ノ城下ニアリ

叡山ヲ大ひえ少ひえト和歌ニ多クヨメリ

芭蕉葉ハ日ましに秋の風　路通
人まれに桐もまさに秋のうを　弥次

加賀の全昌寺にて

淋敷秋風きくや蓴の山　夢石
芦原や遠う寒ぬ桐を秋の風　江戸山川
鶏頭や背高畠のかぎの風　凡兆
初雪や桐の外迄の新行うり　去来
大比叡やとしよる雪の雲の峰　野童
芭蕉ちるて涼桐の苗　凡地
文月やちるも花の秋ハ　芭蕉
全歌の本の葉ハ　同

古今ニハ　うとまれぬ　宋
てをきこちけてをの円寺を
り少やらくん

霏雨又微雨

去年ハ　桐の
去来　イカ
風麦　セ、
及肩　岩葉
杉性　子彫
史邦　三月ハ
旦葉　子尹
明和

柴賣女ハ風俗文選ニ出ル

ヲミナ　和名抄ニ初
楊　俗ニ云天枠棒ノ一ニ
日見トイフ山ハ長崎ヨリ大村
領ニ有ノ嶽

古今ニ秋の哀の子の秋ゑ
すゝき植ゑ出てやまもく
紅と尺ゆらん
里ひクラ重イタニ誤ル本アリ
心ヲ認ル

イタリ
煩ヨリ
ヒロ

八潮を汐ふる海路にて寄ものの
文せうぶてふ
ゆ初ゆ〳〵　楊の先の芭蕉ゑ　元眺
つらゝ〳〵ちるみ見えよ
山ゑて卯ちゑ初て
天ゑもゆゑ〳〵　芭蕉　玄来
茅刈よゑれら里いゑ芭蕉の霜　李由
元禄二年菊ゑ使せられてゑ
つくゑ之誠ゑ〳〵ゑ
〳〵ゑ〳〵ゑ國ゑ〳〵ゑ
芭蕉ゑ

細ゑニ行ノ〳〵ゑトアリ
ゑハ再案ナラン
山家集ニいぶくるゑ
ゑれ伏ゑと思ゑ
芝の家
相の木云〳〵古今抄ニ田荘ノ
酒家ト題アリト云

白氏文集ニ因病病夫憐病雀
ノ一轉ナラン
竈馬　蟋蟀ノ一種ナリ
多田ノ神社ハ八幡宮ナリ実盛
ハ加州篠原ニテ戰死ス胃ト
直衣義仲願書ニ添テ當
社ニ奉納ス

いつゑゑ〳〵ゑ
相の木〳〵〳〵
初ゑ〳〵〳〵
堅田ゑ

芭蕉
元眺
三人
蕉桐

病雀の物ゑ〳〵ゑ　芭蕉
海土の東ハ小海ゑ〳〵ゑ　同
加賀の少松と云ふ多田の神社の
宝物として実盛の家かゑ
かゑを用ゑ〳〵ゑ
なゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ

実盛語ニひるむさんやあれ高
為別當ニそゝのひるくるやや
トイフ詞ヲトレリ
甲ハ俗訓兜ヲ上傳ニ是

去来伊勢記行ニ出ル
道中記ノ奇ナルコトヲ
和名抄ニ鰲魚 本艸拾遺
魚鰲ハ借字ニテ字典ニ
所謂不合ナリ
万葉ニ初月トアリ五日六日ノ月
トスハ非ナリ
伏見ノ城元禄ノ比又廢キ

おさんやれ甲の下のきりぎす　若蕉
菜畑や二段の中のむしの音　尚白
様おりや聖よ来て明れ月よ　風麦
いせよりてにる河
菜月や矢橋よ渡る人さびし　ゝ人　ゝ子
ゝの月よ鰲のたゝきをかゝりけり　之道
栗柿とえてゝく郷の初月数　半殘
月見さん伏見の城の控櫓　支来
菊を茅舎よ高して
おもしろ松ゝきもえよ蕎月数　土芳
賀茂ゝ詣　去来ゝ涙のかゝる

山家集ニたなびくとアリ
やまこゝろ　ちぢのなかるゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　涙のかゝる
幣
賀茂ノ末社棚尾ノ社
髻ナリ

ゝとかのよ人のたなこゝろ
社乃神　堤よ友つきてゝみ
ゝ
月かけや拍子もゝ　孫ゝ　史邦
友きつゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
かけ法師　ゝ　ゝ　ゝ　卓袋
芭蕉葉や　ゝ　ゝ　ゝ　乙刀
京篠ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　大草
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　凡兆
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　尚白

気比明神ハ越前一宮ニ仲哀天皇ヲ祀ル
垂仁二世他阿上人古例ヨリ細道紀行ニ委シ
猫子ハ男ヨリ
かる旅ハ斯有夜ヲ
大和物語花山僧正ノ古事ヲ云
竹

向のうき富士見ながら鞭こゝの
元禄二年ゝの湊より月を見
象潟の明神より佐渡迄行上人の
古例故実
月清し旅の名残の砂の上　芭蕉
仲秋の望敦賀に遊して
かる旅の月も見よとや明迎
月やこゝ変もなきの業の果ぞ　去来
月を見ん人の堪よいそらゝ　昌房
俗正のいとゝ少なのきゝ　羽紅
初潮や鳴つの浦は名残哀　尚白
九兆

一戸陸奥南部領ヨリ
雖又黄頰魚
和名抄ニ鱮知ゝ加布里似鯉而有黒点コレニヨリテ書カ
和尓雅ニ鱮ドス續虚栗ニ鱮トアリ
王安石詩ニ茅檐相對坐終日
鳥不鳴山更幽
むつゝしき云ゝ冬ノ題誤リテ
麦ニ入カ
小ヨ鱚ト云大ヲ鱸ト云

一戸や布も干ぬ弱むつゝ
稗の種の名迹しる筆を
沼糟やかゝるも嶋を其面
ひやもてきゝう望る鱸
一鳥不鳴山更幽
物の名ひとう俗くかゝしゝ
むつゝしき拾ふも尺八里秋来
拾秋庵のつき合形の下
嶋ゝや沼糟来の夢麦畠
ふりと下ぬる雨や秋の沃
鱚鱚ひとしし鱸つゝ

去来
哉人
西鶴
岩葉
九兆
曽良
千里
路頃
九兆
宋瑞

田舍間ト云ハ五尺八寸京間ハ六尺三寸ナリ五元集ニ菜園ト題アリ

童子ノ又髫髮

柿丈去来自戒ニイハク

跛足カ俳諧哥ニ前書ニ用ヒシ事

田舍ノ蕎麥ハ〻ヒ〻ヒ菜の白
菜を切ぬとそゝふみもなすらう
高土をみ蹠の明るやそちきれ
らの花の却もちるふ稻の秋
稻こうつく母ま出逢ふ夕ふ

自題義柿舍

柿ぬ〻和ハちゝきなふし山
去ふ法やゆふく格の下紅葉
孤宅一休和山の蕎石葉

仲田氣

されいてそ比ものの拾ふのなるこの乳

尚白
元角
雅頌
去芳
九兆

去来
壁生
九兆

大石衆ハ〻ノ敵言固ヲ云リ

風疹 和名抄ニ風癮疹トアリ

ちさふハちさするるし

勸進帳正月廿九日月次興行
通題板トアリ

仲田おの戰ふ言 蚊足
拾ふさ〻ちつまちちゝや

蕎芭大石衆ちつ〻ふ
行秋の四方の蹠るまくぎふ
立出る秋の夕やれ石ろ一
世の中ハ鰹鯖の屬の塩もれ一
塩魚の蟲ふきこうゝや秋の言

蕎麥
丈草
九兆
同
芳宇

猿蓑集卷之四

春

柳ぬて人の總ら梅もなり

義治

上臈八菊亭殿ゟ之
八重家ニ仕ニ人と

碧巖云隔牆見角便箕
牛意ゟ

家隆卿之歌ニ
梅の花の匂ひ
のむの初ゟ

清水寺八大神宮の神饌
江戸ふ女と其居ゟ
給ふ三車代ニ
給のあゟと

上臈の山里ゟ
一ゟて

梅ゟ
梅ゟ

ゟ
ゟ

初梅や
梅ゟ

ゟ
ゟ

清水寺の一ゟ
一梅の花

芭蕉

清一本古キ梅ゟ其外
ゟ

林和靖七言律詩ニ疎影横
斜水清浅暗香浮動月黄昏

元禄四年辛未

疲義や作り
灰捨て
日ゟの

暗香浮動月黄昏

八ゟの梅
武ゟ
梅ゟ

年ゟ
ゟ
ゟ
ゟ

ゟ那
元北
支北

風麦
乙弼

百八煩悩のこと
春深き夢の暮の雪の里
かゝれて尽きぬ
云し

夢さめて一百八の雪の梅　嵐雪
百八のかゝれてはいや雪の梅　其角
ひとつ寝るよりあはれ初日　去来
初扇や月追のけて掛ける業　史邦
初市や雪の溝ある業舟　嵐雪

憶ハ念也思也

寺うち貝ハ仕事ハ貝之

雪の月西よる蕎のきゝ所　如行

憶菊と宴中

祇園ハて業をつとたん多枕　嵐雪
掛掛て語ひあくき業菜哉　政通
七種や跡よりあくる雪の雲　其角
赤ゑと鯉の西一　松芽　大学
蕎麦やちるふ咲る芦の雪　其角
徴とハ松の黒さま月松うれ　同
陣ゑるき春の松をなれハ徴之
雪の雪踏度寸垣種ゑ雪　去来
雪やきや一奇のきゝうこの不　一桐（イカ）　沙石（エト）

猫ハ猿ノ腰カケト見立シ

此ごとたりハ田溝ヲイヘリ

くくり月ニハ甘呂月ノ比カ

うらのまゆ　其角
雪やゝ下る墨まつく中の丞　凡兆
雪の色よ奈を生る雨こうら　魚日
義の宅柳　うらハまくくるれ　採九
は猫ハ　くくるの柳うな　ト宅
垣こうまくくて　柳うな　日
うくたり　柳雪ちるの　柳うれ　水
書柳のまくれや　舟の　変　尚白
雪汁や　柳　この　塩のまく　一笑
柳中の　雨まくやくう　自　同
田家　水白
揚水

去来抄ニハ俗情ノヨシニ言ト去来文ニハ定ルの猫の恋の所ヲ　越人ノ秀作ト有

當座ハ今ノ通題ナリ

莞蓬

骨柴ハ枯柴也

くくり侍ハ紀州よりせつ

麦畑よやつくく恋う猫の書　芭蕉
うらやゝ　田びきら討猫の恋　越人
うきなるかれて猫の出なるめ　去来

霞沼ゝて　霞座の雪座

春風ゆ　ぬきる　定の如雨　鶏　鶏
柳の梅のちゝ　日やゝ　二月　尚白
出かゝや　櫃よ　ゆ　鶏　鶏
出代や　幼　ゝ　物　荒宅
骨柴の　れ　ゝ　凡兆
白魚や　苔ハ下　新の　異　合せ　三角
人の　ゝ　ゝ　れて　海　苔　杉峯

ひ〳〵らゝハ春田畑ヲ耕し
おこすヲ云

虛木立芽出シセヌ前ヲ云
莊子獨見二白ノ野馬ノ間浮氣
名之為陽燄
柴胡ハ曠野ニ生ス原本柴胡の糸
ニ作ル芽出シノ細キヲ云カ接ル
原ノ書損ニヤ糸原相似タリ

元志
芳号
百葉
土芳
訓固
九兆
芭蕉
配カ
嵐雪
路通
世水

今ヤ朝ニテ帰雁トナリ

空の門ハ雲ノ生ル所ヲ云

田蓑の島ハ摂州西生郡ナリ
今ハ北濱ト云

雎ハ魚鳥書損ノ
彼ノ抄ニ見エタリ
雎ハ臣ナリ采茹有雎

元兆
沢雉
嵐虎
猪鹿
芭蕉
史邦
雨紅
史邦
昌房
去来

元祥以雛の使ト云事アリソ
姿カ

田螺ヲ腸ト見立ル

麹室ハ葱花ナリ

加賀ノ白山ナリ

潦文選注雨水流於地者
こもくハ茶ナリ

鶺の巣ハ諸説アレトコニ出ヲ
以テ春ト定ムベキカ

春風ふこう吉凶雛の雪の元
桃柳ゆうゆうや女の子
桃の花燒ちらふ如拍板
里人の雛祭ふる田螺哉
燈の消て一枝寒ちらす蕣の花
なを寒ひ冬ひて白粉の殺をの〳〵哉
いらの春愛ふもまもや漆
ものかけやとも人の立の祝もの
若鞠哉もの崔や椶の花
雪の数や菓をすくふ高御
哉ふ乾弾一ひらそ蕣の涼りの

萩子　羽和
烏巣　鳳推
米殘　桃妖
園風　殆頑
土芳　芭蕉

嵯峨記ニハむろ〜淮ふ縞
淺ひ一菫草トアリ一本
カ

たのやうを泣くたもなを山桜
はやをもひて

鶺の巣の樟の枝枝ふ日ハ霞
寒ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜
ふや行んたのうを者の高ふ
ふふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜
芭蕉庵のふるき城址

菫草ふ縞淺ひ一たふ和ふ
木ふ筋拍一ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜

凡兆　曲水
石口　山居
杉風　芭蕉

畫讃

山吹や宇治の焙炉の白ふ時　芭蕉

白玉椿ヲ云花ハ八重ナリ
きハつくハ際立ヲ云リ
髪椒（カミ）

梅の玉子の形

小坊主の鬼逃（ヒ）ナトノ戯カ

白玉の器ゑきハつく椿ノ形　車素

秀方ゆうゆく病ちちり疾嫌
けつらゆもねむ〜こ此ゑゆを
う〜て

笠も椿もむ〜　やうり椿　胡仁
蝸牛折かゆきるつゑきうれ　清水山寺　坂上氏
笠の笠ゑ〜ゑる　椿の那　苞蕉
初ゑくらまゑ〜追〜ゑ咲ハうて　利（イカ）生

東叡山ヲ椿ふ

小坊ゑやねよかゑゑて山ゑくら　碁角
一枝いきゑ〜ぬもゑろし山ゑくゑ　尚白

ハツく
小端ナリ　箸ナトヲハ非ナリ
斗ハ午時ノ食也僧祇律ニ曰
午時ノ日影過ニ髪一瞬一即是
非時ナリ

一言主神ノカタチ見ニクキ事
清輔カ奥儀抄ニモ見エタリ

上東門院御時余野ノ庄ヲ
分チ花垣ノ庄ト名付テハ重
桜ノ料ニ附セラレシトカヤ

谷中ハ東叡山ノ乾ニアリ

鯨の形ゑきゑる　ゆさくら　九地
笠ゑ〜ゑ〜一枝ゑゑんちゑ椿　丈子
ゑゑのゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ　史邦
ゑゑ那ゑゑゑれゑゑゑゑゑゑゑ　子那
蔦塚のゆゑゑ成ゑゑ
ゑゑゑ〜ゑゑゑゑり那の鳥　芭蕉
伊賀の國ゑ城ゑ庄ハゑゑゑ
ゑゑ山の八重椿の那ゑ伝ゑ
いゑゑと言伝ゑ伝ゑ

一里ハ皆ゑゑゑの孫ゑゑ　四
三文の墨東武百年ゑゑ〜ゑ

江談抄ニ曰玄賓僧都者ヲ辞スル時ヲツボハ山水きり一ヨトおろきゑ[illegible]ばまるゑ[illegible]おきゆり
空穂ハ矢ヲ盛物也

[illegible]

[illegible]

[illegible]

行脚事苑ニ云謂遠離郷里脚行天下晩嘗横東奇詩師友求法證悟也

義仲ハ元暦元年正月廿日粟津ノ原ニテ討ガ生食ガ石ニ成ル云對ニテノ作カ

堂籠りの句翁ニ同宿アリ曾良ニ与ヘ玉フニヤ

行春ノ句許去来抄ニ委シ古今ニ引ふれあいあつとおもふ一轉カ又社律ニ明年此會知誰健ヲ含ムニヤ

たわれ猫の恋

芋掘て芋洗ふ川や芋の露　芭蕉

山々や霧晴れ行く尾の移り　探丸

山つゝ海よりとゝや夕日影　智月

とゝくゝて鶴の毛つゞる秋の月　山川

鷺の羽ゆ初てうつる山の外　伊賀 武之

本曾路

其赤の石ゝ見ゆ木曾の冬　乙孔

赤の松小雨ふる初瀬の里義り　雪氏

望湖水惜春

行春を近江の人とをしむる　芭蕉

猿蓑集巻之五

猶も、歎息ノ辺ニテ句の有無の論アリ又和歌ニ近体ニ多シ變格ノミ

白氏文集巻二十四刷毛衣ヲ

三草紙ニ翁曰猿蓑ハ脇ヲ三體ニ仕分テ七ツ五ツ四ツヲ付テ見ヨトヨリ教ヘシト云ヒ三月晴ノ字打越論ナキニヤ

目利安ノ足袋元禄ノ頃行シニヤ

きるの羽も刷ぬちゝ〳〵られ　去来

一ふき風の本の葉ちつる　芭蕉

移りの影ふぬるゝ川出て　凡兆

たゞ水をおもふ蓮葉の露　史邦

まいゝ戸ゝ蛍遠かゝる富の月　蕉

人ゝも之れそれぞれの梨　来

ちゝ〳〵る墨をかゝ秋蕎て　邦

ちきはちらまゝ〳〵の足袋　兆

ゆるも雲言ふうちに出つゝ　来

千載ニ[illegible]年の貝おく
[illegible]つなれいつ一の行やとせ
つあさもらん　時貫ヲ云
ちくさちくさ　ちくさちくさ
ちくさ　ト因ニ　ク　垢付ヲ云
蓮ヲ草芙蓉ト云
肥後水前寺海苔也

原水盧同ハ誤字全ナリ
古文前集ニ韓退之寄盧
仝　詩中ニ奴長髪ヲ裏頭
一婢ハ赤脚ヲ　老無歯

雪気ハ雪後ノ　ナト苔ヲ　ヲ立

星霜ハ年の貝おく
おつるる古年の袖さの点ゝ
芙蓉のおれまさりゝとちる　蕉
吸物ハ生出来ハ　邦
三宝ハ[illegible]の[illegible]
此春も盧仝の男[illegible]て　末
[illegible]木つきもる月の徴　邦
苔ちるふ[illegible]る水鉢　兆
[illegible]の[illegible]立　蕉
いちゝきの二日の月も[illegible]て　末
[illegible]の[illegible]　兆
[illegible]　邦

ヲ二ヲ　ナリ
堀川百首ニ[illegible]
[illegible]
源氏夕貌ノ巻ノ面影ヲ頼ハ
九人ハ大貳乳母ナリ

ハ
蘭ナリ　世話シミナハ假名違ハ
世話トセシハ別意ナリ

湖水の句三ツの字心ヲ附ヘシ
古今著聞集ニ[illegible]人[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

鑪鞴（クヲ）（ハヒ）　鑄物師ニ鞴作リ職人尽ク格モ有ヘシ

鰡（ボラ）ノ鰤一種多ク乾魚トス

ぬのこ　兆
押合て寝て　又立仮ねまくら　蕉
ゑくらの中の中ゝ寒き夜　朱
一撰　鰤　つゝる　世の中　兆
枇杷の古葉と本の芽もえ立　邪
去来ハ芭蕉ハ九兆ハ史邪ニ

市中ハものゝ匂ひや夜の月　九兆
たつしゝを門くゝの祭り　芭蕉
二番茶も出る黒さに種と出て　去来
灰うちゝくゝくゝの一枚　兆

東鑑ニ調柏子トアリ

加藤左衛門繁氏法然上人ノ
才子ナリ法名等阿世ニ出ル世宣
道ニ云其武ニ出くふくるを
元ゝ中ゝ夏ゝくゝるゝよを
ゝまくゝくゝしゝ
ヒ尾撰集抄ニ見仏上人事
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

赤草紙ニ猶猿黄ノ句ニ人のら猿を一句と一世の口板を附られ對附すり地さい年貢ニ

黒ほうい黒土ニ

丁稚句ニ附キリ此くゝ俗ノ戸隠ノ句ノ不意ノ詞カ

天上宗ハ唐辛子ナリ

又句ニ附リ赤草紙ニ委シ

俳句ハ定ク年よりつくるり

樵川の樵ゝ焚る秋の月　蕉

年よ一斗の地よりあるこん　来

五ち本生来つけ先る　兆

景色碗ゝ汁黒ほうの及　蕉

追ゝ早きこゝの口指　来

てつちの蕎ゝあ来ゝう　兆

戸隠ゝも都ゝ地ゝの麦蕎麦　蕉

てん志ゝりゝ山ゝ名つく　来

こゝゝ芋蔓を作る自然し　兆

蕎麦ゝ山ゝ地ゝ初秋　蕉

去来抄ニ翁曰草庵ノ句西行能因ものの境界とゝくゝら じゝ只面影ゝく付ヘト夫来文モ同趣ナリ

浮世の果ハノ句雑談集ニ委シ

一本何れゝヲ年ニ誤ル

掌ニ20 迄初五文字ニ四ツ續ケリ支ノ寛宥思フヘシ

その俤よこちひ蕎ゝる升蕎　来

ゆうみて蓬の花の小梅　兆

蕎麦ゝ志ゝ蓬ゝ居ニ打やち　蕉

いちち時一き撰集のゝく　来

きゝゝよ花かうゝゝ蕎麦て　兆

浮世の果を塔か町心　蕉

ゆゆ色を粥ゝる洞ゝ　来

庵前ゝ蕎ゝ麦ゝ板蕎　兆

ゝの年よ孔這ゝる物ゝ　蕉

かゝゝうゝゝの花の福ゝ　来

九兆十二 芭蕉十二 去来十二

丸
涸又椋トモ云一釜うるほ法
莖ヒトル涸ニ中

家集ニ代々ものを忘らぬ
ちからむもきみによりて
ものこそ
るらめ忘れがたきは
修行者

摩耶ハ播津ノ佛母摩耶山
切利天上寺觀世音并ニ摩
耶夫人安置
梭魚子
ロ壺又クチト

原汁桶の雲をうきりて
ひかりかすりて雷雨まる秋　苔蕉
新蕎麦ふ〳〵〳〵月かけよ　北水
なく〳〵てられ　十の窓　古来
の代碩をかの我まゝくまりて　蕉
雲の高ゆうきの原　北
蕎生て眺ひたる春の夠　来
摩耶の高松よりの加れる　水
夕めるかすまこ食ハれ薑　北
牡の口愛をかぞて葉味ゆき　蕉

西念諸説紛し只面影トヨルヘシ
山家集ニ吹かせのれ多ものこそ
ものかゝハもゝちるゆもお
くれさくらゆ
酢茎ハト学集ニ茎ト見エタリ
茎漬ノ種

ものおもひふ点を体ものを
ふてをちをきの成りのふこ　水
金錦を人よりくゝ方の高き　来
たつ風吾まきの高くの月　蕉
町内の秋も更ふ時ゆき　北
行秋ものゝ霧ゆ雲ゆ　来
ものちる分い西を方点て　水
本雷の邪茎ゆ茎ゆ　蕉
このてふ山信仰ゆ中ゆ　北
葉さゆ宗の心神をこふる　水
ものの方れる雲ゆ北ゆ　来
北

[illegible]八有明行灯

奇シ
冷

[illegible]の一の屋敷うもの[illegible]
[illegible]の[illegible]の[illegible]
[illegible]に龍膽を思草トナリ
[illegible]秋季ノ投ス[illegible]
[illegible]赤渋サリ

死生事大無常迅速

[illegible]の[illegible]
[illegible]おく　蕉
[illegible]女の[illegible]　来
[illegible]　水
夕月秋雲の墻[illegible]の[illegible]　蕉
[illegible]　兆
[illegible]自慢いたさ[illegible]
[illegible]の[illegible]　来
[illegible]田の[illegible]　兆
[illegible]の社[illegible]　蕉
[illegible]の[illegible]名[illegible]　来
[illegible]の[illegible]迅速　水

稜ヲ正花ニ用ヒシハ祖翁世ニ来ルカ芭蕉談ニ変シ初心猥ニ作ルヘカラス

餞ノ吟長途ノ景物ヲ想像（オモヒヤ）ヲ主ヘリ

[illegible]ハ[illegible]ノ意ナリ
和名抄漆之英岐ニ才園譜ノ糯餐今ハ生米ヲ以テ餅ノ形ヲ

[illegible]の[illegible]方の[illegible]よ　蕉
[illegible]　兆
糸桜[illegible]　来
[illegible]ハ三月　[illegible]の[illegible]　水
九兆九　芭蕉九　野水九　去来九

餞乙刀東武行

梅の葉[illegible]この宿の[illegible]汁　芭蕉
[illegible]　乙刀
[illegible]　孤頑
[illegible]　素男

ニ作物ニコ、ニハ只祝ト見ルベキカ
病体ナレト尤モ軽シ

出家集ニすゝき山落葉をとゝ
まつ出てゝいらまたり沼
あまたなるらん。去年文ニ安
の西行をおもひ出るなるべ
しトアリ
箕手甲陽軍鑑ニアリ小西
行長ノ臣小堀内蔵頭カ
萩の札云ハ去来文ニ撰集
抄の故事を取リカリ薄刈
萱女郎花をよ形てゝ
まゝ詠まそ札を付ゝるゝ
ゝ

片陽よ虫歯かゝえて蕎の月　召
二階のぞいゝるゝれゝる花の
散ちるゝゝの蹴ゝえもさん　蓮
稲の穂延のちゝ形ゝ　男
鼓ゝの初よゝ印る紅唐山　硯
内裏所かを時雨ゝ　蓮
印の刻の淺ゝよ苔ふか西方　弱
ちゝきる松のちゝちゝ　硯
萩の札落のれよみちゝて　男
者かゝゝる百姓ゝの一夢　弱
懐ゝを行ゝむる秋の月　望月
九兆

外海ヨリ
懐ゝ徒の栖ゝ者の日ゝ母女
字並ヒテ今人ハ嫌ハヘケレト古
人ハカル瑣ゝタルコハ論ヒサル云

職尽歌答ニ
ゝ
ゝ
ゝ

思ふ俤ならはすなわちかれむ袴お会せハ絹かきたるなるべし
統

咳声

少し面ハオ覚ノ事こくめいハ正直ノ事ナリトイヘトモ同語ニテ音便ノ違ヒノミカ
會津ハ奥州

句引十六人ノ俳名畧ス

愛ものハおもふ俤もけぶりの浦　猿雖
むね折かなせ見ゆる肩衣　残
きぬぎぬかれ見をくる破扇　風
醤油樽きせて去り見くる　鼓
咳声の聞ハちうき根つくる　芳
添ハそふおとあくをんなち新　風
形ちき陰を多ひくる金津笠　荒象
夢雪うくる林の割下駄　史邦
ちるまもくこと〻あつまも定ハ　丈水
鼠の被ものを染る老のせ　羽紅

幻金剛経ニ如夢幻泡影
住止也居也　庵小草舎也　菴古文
菴閭此草老菫可盛獲菴
閭故名　記志也一〻分別ヲ記之
也
岩間山正法寺ノ後山ヲ国分山ト云
聖武天皇天平九年詔天下毎
州建国分寺
杜律注山未及七尺微ト云半腹
ノ一ノ一歩ハ六尺ヲ云
國分村鎮守近津尾八幡宮ナリ
東見記日本神道有三種一曰唯
一宗源二曰両部習合三曰本迹
縁起
諸神鎮座記八幡大菩薩本
地阿弥陀如来也
孝子曰和其光同其塵云云
上文年冬シキヲ云

猿蓑集巻之六

幻住庵記

芭蕉叟

石山の奥岩間のうしろに山あり国分山といふをのがる国分寺の名を侍ふ形ちにて麓より細き路を登りて半腹に庵を結ぶ三畝二百歩すなはち幽栖の地なるべし仏像経巻なをかの一ものなり中興の祖僧正行基菩薩の草創なるべし建立いつの頃にか人の詠ありけれども詳ならず

蓬屋にて月を見るこの月の
又れかたり伝へん人なしとき
曲行
古の彩の袴後ハ今の世のてもの
もれ狐の後京極
人すまずて荒れも寄まぬ古ちの狂
のこまをつくろふれ家蓮
菅沼氏曲水子ハ膳所侯家士
幼住老人因侯長臣本多八郎
左衛門ト称シ探山居士ト号ス天
和三年没セラレシヤ
市中ニ去ル十年斗ハ天和初
ヨリ云
元禄三年ハ翁四十七歳より
らの世のうのや老名の花を
父と母とと呼ぶ〜ぬる
夫木集ニ
しかるかなしさふるとも
ふぬ世なれと
田苗ふる雨ふるなるを日数
句有
去なをとる波のうねくて

住まて一本の戸あり蓬根茅新
を分て屋根とし壁て孤燈
を伝ふ幻住庵の記ハ
〜ハ富士菅沼氏曲水の伯父なり
侍りしを今ハ年斗昔と知て和
幻住老人の名我のを残きり子又市中
をさる事十年斗ありて伊賀
上野ハ藩士の蓼虫のみの残れ
を鍋ぬて夏の夜の暑きを西
て〜高丸ていとうき北海
の蒼海をきひす城跡て深水

きてのゆとくきこの
高濱 能因
鐘
夫木集ニ
かるかやのくき
原のつろ
ひとる
ぬをるのもらん 鳥ハ俗ハ
つかりと云
茨ハ字典ニ以茅覆屋也ト見
タリ
出家集ニ
山やて
ものの山分をとちりなと人
やまちん
さすらハ
出家集ニ山をとけ
ものとハ
ものも
擂鼓ノカリ詞ニモ渡ニモ云リ
ちくろハ坐也無数自吟
杜律吳楚東南坼乾坤日夜
浮 又杜律瀟湘洞庭虚
空楚天不断四時雨

の波ま霧ふ水の深巣の流とする
つき芦の一本の蓬多のすく新堀
蒲ハ多の垣根法師なとして
弟自の初ハ多りなるハ一山の
て半とき一おもひちなるなる
ま多の名残も蓬多ハて一咲残り
山蓬ハ多て時雨ふ
加多の後ハ号を木つきの
ちくろ女ちくろ興て魂長楚
東南ちくろ東湖洞庭ま多
出来申ま

唐太宗詩薫風自南来殿閣生微涼
孟浩然洞庭湖詩涵虚混太清
比叡山　城陽所ヲ云　橋　樊多ヲ云
夫木集ニ柘ヤ　ゆくのゆくえや
生ぬらん　むしるるゆゑ笠とりの
ゆゑ
笠取山山城宇治郡ニテ醍醐
南木幡山ノ東ニアリ
拾玉集ニ大井川星ゝを流さるる
いめれかさる　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ
山家集ニ仙人のかれる　ゆゑ　ゆゑ
ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ
士峯ハ不二ヲ云
おもかるゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ
武蔵野の古き柏ハ深川芭蕉庵ヲ云リ
古人ゝ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ

ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　

睡癖ハ宋書陳博癖史李
嚴老耽ヲ好ンリ其余五雜
俎等ヲ癖ノ人多シ
屋頗東坡詩唯要兩脚飛
屋頗王子端詩簷外屋脊頗
皆好山云云
石林詩話ニ青山捫虱坐黄
鳥拯書眠

人の隙ハ四方に行年行て多く
みるなる物なきも形〳〵持佛一宮
を備て相の物をさむ是ぞ変形と
こそこの生つどりさを筑紫高砂
山の僧平をか茂の甲斐伺うゝり
叢あるそ時ひ浦よの曲りいまそ
かりけるを行る人地て額をたふ
いとやすく〳〵と事を際て幻住庵の三
字我おくらる我て名尾の記念と
なす世人て山居ふいひ旅の情と云き
る繁多くはふ居こそ形本質の情

古文前集朱晦菴雲谷雜詩
野人載酒来農談日西夕
張謂詩夜坐不厭胡上月
又白氏文集巻十抱膝竹前
影伴身
莊子閒兩問景曰曩子行
今子止曩子坐今子起
問兩影外之微陰也
高士傳
軒轅ヤ、音便ヤウくり

笠越の義兼年一枕の上は程をみち
雲八稀〳〵を物ふ人ふ笠を動
行ふ宮雲の菊里のそのさせ金年て
るの志の稲ふいあふし完の主細ふ
うふふ古と我門寺の農談日改ふ
の塔ふかゝ小教座野ふ月を結ていい
新を使ひ灯をれて八間兩ふて水を
ふ古かく〳〵ふてひふふ宗寂を
ぬゝ山壁ふ縁をかくさむふ行氏を
病多人ふ使て笠をひ一金ふ
徳年月の移ふ一枕き多の料を

任官懸命ハ君ヨ仕ハて俸禄
領知ヲ新ウヤヒより
恵能禪師吾三十而宜規佛
籠祖室
[illegible]
巻物ニモ斯アリ風俗文選ニハ
[illegible]
ハ方ト[illegible]意カ因云ヒ[illegible]
自書巻ノ假名寫
生涯竹子一吾生也有涯

白氏文集巻廿詩役五臓神
酒渾三丹田元積ノ詩ヲ引非
ナリ
李白寄杜甫詩飯顆山頭
逢杜甫頭戴笠子日卓午
為問緑何大瘦生只為從
前作詩苦
白氏文集十巻賢愚共季落
論語注商端質周尚文
山家集[illegible]

おもふ所ハ仕官懸命の地をうる
やうにこそ[illegible]佛籠祖室の窟ヲ
入[illegible]
[illegible]
[illegible]

佳人佳美之徳ヲ菊ニサス

滿口錦繡ハ幻住庵記ニサス

依稀ハ髣髴ナリ

勝覽ハ名所ニ同シ

震軒何井元禄字履信号仁島子又向震軒ト云去来ノ兄ナリ

具供具也草ハ草稿也

伊勢ノ震風又大草ナト云ハ大ナル推量違ヒナリ

茅屋竹椽繞數間
内有佳人獨養生
滿口錦繡輝山川
風景依稀入詩城
此地自古富勝覽
今日因君尚益榮

元禄庚午仲秋日

震軒具草

幻住庵松若日記ノ句ハ庵ノ閑静ト勝地ノ眺望ト翁ノ幽操トヲ賞セル作ナリ

ゑつさくハ翁ノ嘆ヲ云リ

ゑつさく時ハ鶏の乱レ鳴時ヲイフ

海湖ナリ

岩梨ハ常ノ梨ヨリ花遅キ種アリ和名抄稿ノ夜未奈之山梨也細腰ハ俗ニ云やせすねナリコレモ翁ヲ云

几右日記

時雨降中ゑつさくる蘆の那
こつさめの何と降こる友の山
鶏もゑつさく時ハ鶏ゑつさく
海湖ゑつさ自白ゑつさ山やこ
ゑつさく岩梨ゑつさ猿のゑつ
細腰の体の一変や友の山

曲水
北水
去来
九兆
子那
孤頑

贈紙帳

おもしろ紙帳ゑつさ
いつもゑつさ茶の茶ゑつさ
茶瓶ゑつさのゑつさけの

北經
里東
乙弱

花望木（カウチ）

あらくしは貫束ナク又不案内ト云コトリ方言ニ多聞者路多豆多頭四ト云ニ同シ

訪（トフ）ハ音問（オトヅレ）ナリ

あらえてハ拒ノ義ナリ

顔（カホ）や薄の穂のもうつき　セ、姫淮

あらくしは束ねたる月雪　掾志

五羽白鷺とりの雪雪石　元志

本つきふれくてゆるる秋水　セ、泥土

笠ぬいの山根の秋の色　史邦

月紙や海を風見ゆすくこ　西秀

志つのまに栗の葉沈む清水哉　夫、柳陰

時しさやとも米のむ稲の穂　如行

訪ふ留主ぞより

稲の末をあらえて時雨の影

目の下やあらふ稲に海原　セ、朴水

ミノ国井市隠

膳所ハ上米の上地ナリ

麰（バクイ）麦の粉ノ

書音ハ文の便リニ

一反ハ反歩のこと

さいろいはいしばうと云カ

行歩ハ正字ナリ

文ふみ

稗不米や田苗の色ひよろ夕涼　半残

麦の粉を土産哉

一袋これやあらの和田のくこ　麦之道

書音

一反ハ山ちくりの弘泉寺　長寿　魯町

夕立や稲の真の一土つより　及肩

昼（ヒル）猟腰掛

秋風や田の上山の色ちり　尚白

贈蓑

志ぐれ雲ちきくの墓のくれ　北枝

扇女之

羽和八九兆ノ書之

イヒ
竈馬又竈雞酉陽俎狀如促
織稍大脚長好穿竈旁

明年弥生八元禄四年十月

木葉ぬく傍よりうゝ蓼の花　木葉

色紙ニ書

陸奥紙や苧麻の二霞　七、扇

稲の葉ゆれを佛の土産哉　知月

石山や切こうそうそう秋の風　羽和

桶の箍やきれて咲やむきりぎす　昌房

星ハそゝ夕飯時のたつきこそ　仍如

咲や咲く塩ちりのゆるる迄　越人

越人自〻く訪者て

蓮の実のさゝ葉八尾ゝ秋　等水

明年　弥生元日庵

まゆ玉や阿〻しも果代戸の山つゝ　尾茅

日夏

宗〻まや世尾ゝを一位拵〻　勇氏

史記清誓猶俳諧
一本髯ノ韻ニ龍ノ髯響ニ同シ

清正記云唐大中八年終南山ニ僧アリ奄ヲ結テ定ヲ習フ一日裝リ其伽黎衣ヲ解被テ安坐ス群猿有テ隨テ皆定坐ヲ習フ史記項羽記人言楚人沐猴而冠耳果然逸人逃ヘリ定坐ヲ習フ此事林間録ニ見ト云ヘリ非ナリ其録中ニ此事ナシ猶尋ヘシ

礼学記ニ学不躐等日不凌節而施　躐乱ナリ　凌乱ナリ

孤晩白衆孟嘗君ノ故事ナリ王哀講德論千金之裘狐之腋也

易曰憧々往来憧々徐貞

詩大雅縕隆蟲〻縕聚也隆盛也

異兄也仲次也

騷士説文ニ今謂文人為騷人也

跋

猿蓑者芭蕉翁滑稽之首韻也非比彼山寺偷衣朝市頂冠笑只任心感物寓興而已矣洛下逸人九兆去来隨翁遊學棋館竹窓躐等凌節斯有歳屬撰此集玩弄無已自謂絶超孤晩白衆者也於是四方唫友憧々往来或千里寄書書中皆有佳句日縕月隆各程文章然有昆仲騷士不集録者索居竄栖為難通信且有旄倪婦人不琢

礼記檀弓吾離羣索居寄散也　羣隱也索也　栖ナリ

旄倪孟子見タリ　旄乃老同倪猶小之称ナリ

東坡全集龍星硯歌ニ長言細語都不擇

域男弓也　四牽ハ四時ヲ云

聡古之時字ハ之日　稔年也

数熟為一年

択氏要覽ニ安　僧為掛錫

櫛居ハ書ニ同シ　卒ニカケリ

機度量ナリ　渡幾希望也

詞海漁人ニハ俳諧ノ詞宗子猷

風狂風騒同シ　野ハ鈍ナリ

僧衣ノ謂納

丈艸尺ハ大山世臣二十五歳ニテ

鮮武玉堂和尚ニ茶弾出家ス

前芭蕉門人懶窩又佛幻庵ト号元禄十七年二月廿四日寂年四十四

漢書解耕録謂騷大夫為漢子

磨者麁言細語為喜同志雖無至其域何棄其人乎共果分四序作六卷故不遑廣捜他家文林也維時元禄四稔辛未仲夏余掛錫於洛陽旅亭偶會兆来吟席見需記此叟題昏尾卒援毫不揣拙庶幾一篇高張有補于詞海漁人云

風狂野衲

丈草漢書

正竹書之

文草漢カ　漢書ニハアラシ
正竹ハ雲竹門人

漢相如ノ文ニ朝開元窓夕汲心泉

莊子逍遥篇ニ宋人有善為不龜手之藥者世世以洴澼絖為事客聞之請買其方百金聚族而謀曰我世世為洴澼絖不過數金今一朝而鬻技百金請與之客得之以說吳王吳王使之將冬與越人水戰大敗越人裂地封之能不龜手一也朗詠座炉辺手不龜苦公

小文章備五論真蹟集ハ金屏の松のなさりに作ル智記赤艸塔ハ金屏ヨ古めやニ作ル句選泊船集ハ金屏の古句

岑雲序

去年の春を探りて孤屋四壁破利半畳ハ常ニ苔蘚の新るを行かりい庵の面を洗しきを心の空をくうとして十竹より形くの久雲の四方をとけ竹くる蝉の雲凍りそをを竹の中をとる拙なりこ三ヨ庵ヨ竹て火桶まち一炭を知ることを庵をもとるとをけ宋人の手をもとをけ庵をもとをけ宋人の手をもとをけ庵をもとをけ宋人の手をもとをけ庵をも

三作ル
杉の目度の目ハサトキニヲトヘニテヨリ

王維詩有聲画画無聲詩

ケタトモ
蓋斯

毛詩正義曰名篇之例義無定準名不過五
源氏栄花のさゝくの名つくるも
ヨハ[illegible]

耳ヨのはくまもろる杉の目度の目
ものそ之課のまもりくるはるも是
を思の至者の目ハのつ[illegible]ゝ秋
の目まかしらかるもけてやゝ[illegible]
篇なりて遠を[illegible]の二篇ニ
わこるもん[illegible]をひき[illegible]
の画をものやとりをさもれハ又ぬき篇
ハ篇ハえこりにくしも頭をかゝ
ハ[illegible]ハ詩の正義まくるもつの不
あるハやもの書くのあるひもあ
ハ例の名ハ[illegible]

文選首途

醉醒集ちきりの[illegible]
[illegible]
[illegible]

元禄七の年為国まつり初之る志賀寺

炭俵集上巻

芭蕉

梅ヶ香のつるの引る山路哉

曽波

雪ごしの雑木の芽ぞ吹つゝ

芭蕉

赤蕪を煮て食ふ人の白雪

坡

上の寺うつる日ぬくし冬ごもり

芭蕉

青の内ちらし過しの雪

坡

蕪蒸して秋のきれしき

坡

清所に業ふる人の冬ごもり

芭蕉

炬を望う人よ居いせぬ

坡

赤良国の四一つ寺の初基

坡

華白集ありうゝ〜ばせをの句をあらうけ句〜を出すきをなり

班〜

御頭

清袋 市ノ字四句去 祖翁見落ト云テ許シ玉ヒ
終宵 ヨモスガラ
蒟蒻 コンニャク
素掛一本 蕣掛ニ誤ル
居合、劍術林崎重信カ末裔
京師壬生寺自三月十四日至十五日
有念佛其間大入作俳優
東風風ハ時雨の雨風の風
ナトイフ和歌ノ例カ

ゝ
遠山の ふもとの ゝ 自
新けの 味噌 ゝ ゝ 雨の 雫
ゝ ゝ 光 ゝ 袋 の ゝ
蕉窓 居 の 病 を 押 ゝ
ゝ ゝ ゝ 名 自
初 原 ふ 素 題 下 地 表 て
雲 を ゝ ふ 居 合 ゝ ゝ 蕉
町 底 の ゝ ゝ と 破 て の 蕉
門 て 押 ゝ 壬 生 の 念 佛
東 風 ゝ ゝ ふ 糞 の ゝ ゝ れ を
ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ

蕉 坡
蕉 坡
蕉 坡

未進ハ年貢ノ納メ残リヲ云

無好ノ事

及岡ト云フ書ミヤハ
拾ハ天王寺ノ四リ安楽院ト
ヨムヤウニハ〻く位て才ヲ
寂閑ケレハ余松丸ト世ヨ
遂ヤウの物をこてらへて歌の
作リヲ高れいると云云
拾は福条の小編ニテ作ヲ
雀鮨ト名ハリ

魚ヲ喰ふく濱の雑炊　蕉
子多時一枝くよりちり　坡
未進の高のそそぬ筆用　蕉
隣へも志ゝを時をつまて　坡
屏風のかけよ尺ゆる筆ゑ　蕉

三吟

兼好も延引ちをり　嵐雪
ちきみや苣ヨ雀鮨　利牛
けきちまの少坂のかりて　坡
知をぜりくる閑ふ去撲情　雪

雑話集ニ朝日匠の夕月校トハ
七日以前の月をいふなり
又源氏物語ニモアリ

泥海ハ田野赤茨水ニテ海ヲ云

喋くり　寵くハ非ス
豆ノモヤシヲ料理家ニテ貝割ト
云リ
黒谷岡崎聖護トモニ洛東ナリ
紙貫ハ革ニテ作ル雪沓ナリ

雑役ハ牝馬ナリ

知くと新るころの雪の自　牛
雪稲も晩稲もよ生　みぬる　坡
源隆をちりよ源れるのそまらん　雪
ちちちちまま経ハ屋の縫ふ　牛
傳ふふ若く時を呼ふまる　坡
ふふくくふも雲ふかのふふ　雪
運若の口を雪時聖護院　牛
ちちのかけを二段ふふちち　坡
弱ぬきのいぬの掘なる雪ふく　雪
人のさくぬ松運む与り　牛
雑役の鞭を下ハ口ふ雪て　坡

タタク
瓦陶ニシテ庭訓鍋トアリ

聟ハ俗字ナリ

カヤノイ
畧淮ナリ

飯の中にまぜる芋を蒸る自然薯
牛蒡
薯蕷ハ芋ハ山ノ芋ハ芋ハ
牛蒡
薯蕷ハ芋ハ山ノ芋ハ芋ハ
牛蒡
薯蕷ハ芋ハ山ノ芋ハ芋ハ
牛蒡
薯蕷ハ芋ハ山ノ芋ハ芋ハ
牛蒡
薯蕷ハ芋ハ山ノ芋ハ芋ハ
牛蒡
薯蕷ハ芋ハ山ノ芋ハ芋ハ
牛蒡
薯蕷ハ芋ハ山ノ芋ハ芋ハ
牛蒡
薯蕷ハ芋ハ山ノ芋ハ芋ハ
牛蒡
薯蕷ハ芋ハ山ノ芋ハ芋ハ
牛蒡

ヒラリ
片ク

壁ク

薬の種ハ球ノ如クニ成れ
牛蒡
牛蒡の皮ハ球ノ如クニ成れ
牛蒡
牛蒡の皮ハ球ノ如クニ成れ
牛蒡
牛蒡の皮ハ球ノ如クニ成れ
牛蒡
牛蒡の皮ハ球ノ如クニ成れ
牛蒡
牛蒡の皮ハ球ノ如クニ成れ
牛蒡
牛蒡の皮ハ球ノ如クニ成れ
牛蒡
牛蒡の皮ハ球ノ如クニ成れ
牛蒡

深川芭蕉庵ニ行テ見ル（シ）

僧都職原抄ニ准四位殿上有大少正、權、四人

ふかの川とかゝりて
宮ゐの社ゝ麦の穂　孤屋
蓮の水鶏のたゝく深川　芭蕉
世話を直す数珠の百像　宿水
そつと覗けハ酒の宮中　利牛
夏雲と浦ゝ白雨の百
ちらと蝉のこゑ秋の色　蕉
きりゝす義のかゝり咲て　屋
吹の法ゝの工夫まる　牛
味をよい所ゝ思ふ　水
俗物のよく生文成ける　屋
蕉

ちゝそハ進ニテ有

鉢坊主ナリ

風ふく秋の鳥の啓ゝ
水
蕉の葉の落ゝ所を見るよ
牛
駅汁義仏者ゝ
蕉
菓の実蓮をさけて
屋
世者ハゝ
牛
こゝ極を分ゝ
水
雪の法所ゝ
屋
ふゝん地ゝ
蕉
ふ届寺隣と中の
水
ゝゝ坊主ゝ
牛
法ゝの世ゝの出界ゝ
蕉

七夕ニ名月ノ附たきの詞ニテ考セタリ

屋号を名付くる加賀絞 屋

昔の俳諸を集て本所洗濯屋 牛

おもを選て 撰 恋 墨 水

名の字の上を略して 撰 恋 屋

年貢納を初穂と名付 蕉

潮撰 祖父の名数を選ま 水

撰忍 すゝぬ七夕の 牛

名月の月を賞せしき 茅 畑 蕉

すゝ〳〵いろて若ふ義 鉢 屋

らの志ゆを宿の面ゆ上 牛

山の根際のゝ移かをを 水

テレ裸ハ褌也 同ジ貫両脚上繋腰

鳩ノ名目ニモ珠数ト云モ表ニ不

鶏

撰 屋

晒の吹出 牛

花ゆを如ゆ斗ゆ花を 蕉

笠の笠形ゆ蓋ゆ 水

各九句

百歌

ゆハ裸式ハて手て苗舟 利牛

岩のいゝの生ゆ口峡 哭坡

百ゆう珠玉数の生ゆて 紅屋

ゆ力所ゆ赤の小西 陸

笄竹ゆ菜屋の細ゆう舟 牛

坡

嚩

和名抄ニ茹物

ゆでものハ魔の餌箸ノ中ニ
ちゝめをまゝヲ云リ

伊勢矢川ハ中古賞ヌアリシ処
より一本商ヲ関ニ誤ル

竹、弁官ニ十二三ハ尺ニ大撃
イハノ三カ

ちゝくハアゝり二跡言五ルニヤ

ちゝくハ天の自千葉の蕨汁無アリ
掃ハ竹ノ枝ニ帰ちる
ちゝくまの中て天ノ生花ちる
竹ちゝ形れとちゝ仁平治
松飯ヲ光門てちるうゝ勇
ゆゝく稗もつゝき雪の松
十二三年の右巻の手拭い
ゆゝきちる青ハとろく
日の竹ゝる京竹ゝむ竹の巻
呉青巻ちる口ちゝく水

屋
牛
坡
屋
牛
坡
屋
牛
坡
屋
牛
坡

裏ノ詞ハ行ヲ行ズ見ヲ見ズナ
ト云東近江ニ多キ詞ノ
根占考ナリ

鰐ハ鰯ノ一種

教供ハ三月廿一日弘法大師
忌日ナリ

多ゝくハ帝ホノ和物南都
法論味噌ヲウツレリ帝本和
物ノミカキラシ

辞羽ハ伯繰又クメキト云物
ナリ
集

ちゝちゝの翼を多和て
天蓋のおよ云ハ月の照り
生ゆゝ青ゝ青ゝ青ゝ
緒の実ゝ屋根くゝる
帯青の有りちゝむゝ
古教住の人のちゝつく
ちゝを二日青のいゝ生
ゝちゝ竹ゝの猫ちゝ
ちゝ神を抜ちゝ
舞羽の青ちゝ
ゝゝ白ゝ
ゝ西国武士の青のちゝ

坡
屋
牛
坡
屋
牛
坡
屋

蜣ハ能坐蓋糞ヲ

芋萸 和名蕨 芋茎ナリ
和名抄 特牛 万葉九ニ特牛ヲ
案 頭ハ大ナル牛ヲ云ヒテ犢ハ偏言ヒ

尚きのふのうりを大旱
切蟬の殼 俗〳〵うら枯たること
うりう 瓜を仕込 度度
瘧 日をさきぶるもの
牛 蒔て生げ〳〵るを苗の生るを
坡 はれたのの名我ゆけは四
屋 嶋のうらの麦を井の水
牛 麦の白 樣に成る古柱
坡 ちいきの老のたるを云つてひ
屋 ひうりと無るを浮生ち
牛 戸てかく〳〵居風呂の石板
坡

概ハ概ノ正字ナリ

天満ハ大坂ナリ

堡壘城ハ石垣トモナキ小城ヲ云

綫り遠て概と概のなれ行ひて
屋 あい小雪ち彩〳〵きうち
牛 濱をちゝ和の男の子のを加〳〵
坡 師を比丘尼の袈裟のをさよ
屋 保樣の四をしく哭かて
牛 天沖の状を又見れたり
坡 麦袖をうつ引ゆ〳〵彩の者
屋 むく部子て無る氣 者
牛 燒去さる影を風をさうして
坡 十四五歳のふうちうしちる
屋 月もるかき行け煤の沈斗
牛

弦打山ハ讃州阿ノ浦山ナリ
水蘊（モヅク）和爾雅水雲和名又海雲ト云
蚕ニ四度ノ休ニアリ終ヲ蔟休ト云
小昼ハ巳刻過ヲ云

笠寺ハ嵯峨ニアリ小倉山ノ麓
二尊ハ釈迦弥陀ヲ本尊トス
信心銘 毫釐有差 天地懸隔

弦打屋海雲とる梅　坡
樣姉結かひこハ屋を紀かう　坡
小昼のとろの空をつのこ　半
樣姉（ヤナ）を結くる足を投ケて　屋
渦の縞かけを急入くる人宮　坡
麦畑の畝坪を渡る擂ホ抗　半
麦をもきふしに形成の菅　屋
物毎もるれハ者ハれに　坡
又ハ局の古ハ　半
岐をちつくるハ二号境　屋
ふんかく寂ーかりとり　坡

一積生（ヒトヅクリ）
滑袋（ナメスキ）ハ複茸ナリ

於田川ハ染模樣ナリ
爆竹（ドド）ナリ

麦畑の　半
ひとつくるる　屋
鎌の音　坡
鎌きーよ　坡
引ちきる　半
ちの月　屋
ちくきくる　坡
雲の　屋
国を隠て　半
母屋の　屋
又ふくて　坡
笑ふ　半
かくかくかの　屋
ア朱る人よ　坡
筋まひよ　屋
本殿於の　坡
於田川　半
古業和の　屋
おやくとんどをてくきれ　屋

極原ハ京七条通リ丹波口ナリ

ゑゝ時ハ薄暮ナリ

何年菩提トハ久シキヿヲ云菩提達磨ノ九年面壁ヨリ起ルカ

濕ハ濕気ヨリ受シ病ヲ云

水菓子ハ鯨ハ汁

菓子の内引抜て居る極原

風雅ゝゝ返ゝ少よく

薄かゝゝゝ時の百姓吉

ゝみつく月の六月

拵立て居上の書付ふ

出ゝつゝる詞かふこゝ

大水のゝゝぐゝ畑の水のけて

河年構提ハ多れ数物の米

雲金ハ方国心の詞を聴

九水千日還ゝらふ

坡
半
屋
坡
半
屋
坡
半
屋
坡
半
屋
坡

一本アゝつゝをヨヤふつきミ誤ル

土ツはハ朝日初メカラチリ

慍ウトム心倦ウミテハテ果トモ

栄花ゝゝろゝんーもてさせ

めゝて

丁寧俗ニロ個作ルハ非カ

定免ハ年貢ハ定リナリ

投打ち後立ゝれ名つゝ

見ゝ一碁盤ゝゝ惜ゝ来る

里鮭れ昨拵引のゆふつきて

釣ふゝものを蛾の襟のと

菓ハかゝる彩ゝ寺の鐘を若

うんー果ゝる八ゝ社ゝら

丁寧ハ細業係の口かゝり

沿ゝ沿て土ゝゝ形る節

夕月ハ鶯ゝの名ゝを夕ゝら

白て庵る鮭のゝゝきゝの

定免ゝゝ年の風ゝ欲ゝて

屋
坡
半
屋
坡
半
屋
坡
半
屋
坡

加茂法示百首夏十五首ノ中
此くさいハ伊勢物語の主なる人をいひて
伊ゝうれ〜なほかう〜ゝ歌
猶去来抄ニ委シ　慈鎮

牛屋
濁酒の酔よ山角をうるさ月
幾月ぞて越る夏　坂
藏も老奴鍛冶屋の元亜の居住
門遠歩尺　町の　侯　牛屋
彼岸迄一生の志の峠立て　坡
三人形ゝふおすゝきき　素　飢業

書の部　歳旬
立春
蓬莱　ゝゝ伊勢の初仮　蓬蓬

猶遺ニ伊勢あくハ海そこやこ二ゝ
をとんはゝ白川の関ハくるゝ
平家物語ニ嘆よちうハ
伊勢ハ
丹波ニ越ト　ル
柿小袴雀ハ奴隷ノ比諭カ
悍ナリ
ちの四のうちちとちふハ赤
ハ三ハ
せん

海苔　杉菰　玄米　四季　酒屋　岱水　沾圃　砂屋　利牛　聖波

梅

徒然草三京極入道い二重の橋を評しよく拙しれくり又橋、清水まやさうそ屈曲ありト

住スルナリ

飛ぶ走りなり 赤柿句ノ脇ノ詞同シ

梅一本ありけるを

うゑ侯やゆかの秋吉野よりき曲り　震泊

梅うゑの命ながらえる初口哉　曲象

重のうちをたのもしく　支考

梅ちるやあの花の口ばかり　土芳

梅咲て酒屋の爾ばかり　利牛

赤味噌の日ばかり梅の花　淋力

みちのくの梅の花　聖坡

和梅ハ姫ばかり書る　杉風

きぬぎぬの花ちるやうに別れて

とちるとも新て白ふる菜哉　千角

ちるや桜ひとつかけて切刻ム　聖坡

うちむかふ菜摘哭る昼ふし　仙杖

洛ちりの文のそらゝ

徘月一見てもわれうかれ　支考

大原やさくらの花ゆ徘月　伝　支考

徘月ちるくもかれ枝中哉　仙花

源川の雪ゆ

ちるやうの雪の跡ちもこゝ一　利牛

十ちる古や睦月の古ゆ哉　大井力　之乃

猫の恵初ゆ分ゆ哉之　聖坡

猫のうちくんつゆ小梅ル　千角

金練柿十リ

五狀持ハ柳アル家ノ程ヨ云ハナリ

鄙の懐紙ニ雨中トニ字前書アリ

五器本字合器ナリ四ツハ釈氏要覽ニ十律曰鉢半鉢大鍵鍮小鍵鍮トアリ

初鮓鰹ノ小ナルモノヲ云又大者名鮨小者名鮨

馭殿 為左右馬頭人役者尊称云爾

杜丹ハ唐土ノ花王ナリ

化又霊ナリハカナクモロキヲ云

五元集ニ打ルヨ被生偷盗ヲト前書アリ

家桜ハ家ノ桜ヲ云

昆布ハ昆布煮出シ汁ヲ云

古今三矢金山く去侍の平山
栄一ゆゆる細谷川のまのの
やりなき

伏見八山城ナリ

菖蒲神ノ口茶ニ立リ

松ナリ

おもうるさきふるやや春山　孤屋
ゆきまて松ふ日ゆてもたれ小　理坡
食の河岸ふ人ゆまの松のさき　全

上巳

帶解ヨ川のまの浮平ふ　沾徳
春ゆまやややもうの松のを　梳濤
ゆふきの神八つ原を春の鶯　其角
鬼のまの俳を春の鶯ふ　ぬ汀
ロゆ海をまゆ春ゆ松のを　理坡
庵の猫毎ゆ鶯ふ松のを　利牛
義塚やまの点かく松の葉　孤屋

新古今三雨中春雨ぼりくと
まのなゆのさゆ一さハ志の
ふるくく小野のゆ水　紀貫之
流塵

春松の浦ゆまくく汐干小　芭蕉

題点ふ寺

洗ふ石ゆ春お辺小鉢ふ　廿日夫　為有
まゆ山松の栄ふ庵松の浦　蕉
義球ふつしの藻やこ三本　子珊
おそくとゆ焼つの蕉ふ　恕笠
ゆの約焼野の漂や地の末　イカ　猪鹿
春きよきまの葉の麦の嵐小　仙兼

松浦ゆ

清廉潔の地ふり内ハ堂ふ　理坡
世集ゆまくまの形ふ氏所谷松之

[illegible]　即彼
[illegible]　利牛

夏之部發句

昔夏

塩魚の素干しもとおとし　花雪
[illegible]　即彼
[illegible]　九貞
[illegible]　雪芝
[illegible]　石珊

碧巖集ニ柳暗花明十方戸

恩馬青色也去来抄ニ月毛トアリ翁ノ一直ニヤ

ぞうかけハ桶ノ箍掛ナリ

梅ノ歌ハ船唄ナリ

宗低の髪世ニ名高ニ
万葉十六又袋草紙ニ彩田郡紀
玉ノ婦人後ろ田の池ハ赤しる
[illegible]

[illegible]　利牛

[illegible]　芭蕉
[illegible]　玄朱

旅行ハ

[illegible]　許六
[illegible]　支考

[illegible]　湖春
[illegible]　素堂
[illegible]　芭蕉

あと

江戸本所ニ一目二目三目ノ橋アリ
又伏見トモ云ト五元集ニ前書
ナシ一ノ橋伏見街道ニアリ
盛衰記ニ法性寺ノ一ノ橋ト
見ユ

柿寺ハ美濃國厚見郡立政寺
関ヶ原御陣時神君ノ柿ヲ献
ス

郭公

ほとゝぎす二ツ三ツ鳴くる板
時なる一二の穂の赤味の郭
り竹を自の赤うなる時な
板竹の実なる渋柿一ツ板
木かゝれる茶摘さ笠や社宇
まこもや水鳥ら一羽る時な
おとゝぎす鳴くゝ風ぐるる形
る歌者の出さ物ぬ板るうれ

麦

柿ちる麦畑芋や作ら

桃源
三角
岩雲
杉風
蕉雨
素竹
利牛
聖坡

三ノ
前口

五元集六傘又ハ笠トアリ
元録ノ頃ハ紙ニテ買入形ヲ作リ
賣テ用ケリ
ちおるおぶ・ぶ・ぶ・

くせる

せうてーみ

長嘯

ちとせ　もゝくさ　ゆく　あの　ふる　ゆく

ふる　ゆく　ふる　ゆく　ふる　ゆく

ちとせ　もゝくさ　ゆく　あの　ふる　ゆく

ふる　ゆく　ふる　ゆく　ふる　ゆく

緑あり　新川の辺茶の名産多シ　之を祖ノ比此国ノ茶家ニ日用ニ

セリ

五月雨や水流れかゝる石のやゝ　桃隣

五月雨や　ゆく　ゆく　ゆく

山嵜巴モ義仲ノ妾ナリ

岷山草木ノケル山ト云

水葵ハ浮蕃ナリ夏秋紫花ヲ開ク

本草説ニて

やまうるもも巴も出る田植うた
巴ものやうに出る田の夫
たゝ山やんまうすきの如生ゝ
蛾の貝をやもさせよ蓋の茶
百色の兩葉こいろ 俗号弘
茶ゝ一面のうやゝ 葵
一つきれ 蟬もうろつくゝ葉弘
ちりかゝる 蟬のふ義す 鍾馗弘
猪の牙ゝもけゝる義子うた
国府爽伝河のたつき 事

仲六
知内
北鯤
乙弱
丈茶
仙花
桂之舟
三ノ 殘香
サカ 為有
怒阪

柄杓ヒシャク
雑魚サコ

定家机ハ脳息ニ似タル物ト云

行ゝ水をうつてとうふ茶漬うた
時鳥ハ出うれて浮ゝ 春
まゝ〜さ成工花と柄の茶うた
まゝ〜まゝ浮海のうつ波と
夕海とうつ茶を百よのうつ
こゝ色のかけうて浮む茶うた

鶯やう

梅や宮家机のたつ とゝ
鶯外むくゝ蝶茶漬きうつ
世の中ゝ茶屋品のうゝ の色
正乙茶ゝかゝてとうる茶漬弘

揉芝
知内
元茶
ユウ
玄茶
玉波
事茶

杉阪
正茶
黒茶
花ゝ

けうとくさい氣疎より又物恐ミキ

無人望（スケナシ）　源氏横笛ノ巻ノ侍力

阿闍黎泡盛ノ上品より

餐（アルシ）　蘂

別墅ハ別荘より

けうとくさい氣疎より又物恐ミキ

一枝ハまけ形ぶり　裕甫

外のうめ　仙花

外のうめ　冠雪

きるこき人僕の話をたつもうの話かくく

戒（サト）めあひて渝せむ結ぶ　ちれを

よく知て行くき泥棒けと名ちるかくく

取ちてうしさられ紙ハ汗をかきて

改て酒ちあのつく　器　利牛

行人の名望ハ形ぶるおあぎ

物ちて一ちつくかのかをなるめて

行ちを寝て左ちうの方ハき　北鯤

炭俵集下巻

秋　秋のはのれつかくの中より月を獨て時候の序を

名月

名月やうつくしかるべき夜一よさ　游岳

名月や極りなきハす乗の虚　古來

家買てきて不知る月歌　芳号

名月や淫欲新寸森の　海堂

松蔭ハ生（モチ）ぬ拾ふ江の月　黒来

もち汐の極の波をよるの月　利牛

吹起ス手ヲ合テ鳩ノ真似ヲ云ヲ

望（モチ）ヲ二ツ大汐ヲ云リ

望拳ハ不二下筑波ノ相望ヲ云リ

是ノ世ろふハ灯の影なり
ろぷの約りるなり

おらがつま立てうしほの自　其角
むさしの仲秋の月初てん行て
望月の不盡筑波を
名月やふじ一ぱいの雲の上　素堂

七夕

笠の華ふ枝ぬけて星むらへ　其角
星合ふもこゝろ合ふや牧谷の鄙
あまてらすやうかうこゝ天の川　祇雪

玉菜盆

たらきぬるかけろふ軒や玉菜売
踊こゝき程ふハ強て冬の月　江州 李由

閉関ノ説風俗文選ニアリ
説ハ言葉明カニシテ人ヲ教諭ニシ
ムルナリ

古歌梅ろ長城橋の色まもと
せ波く松の枝まさ冬て名

冬の月寝ぐらかしらを鳥きゝ　建仁

秋良

閉関

秋良や蛍ハ線ぬろ古つの鉦　菅蕉
鉦ぐるまや日蔭生てり沼の稲　利合
てーろ永と秋良を字拾ろ形　洒堂

秋出

年ふれハ秋ハかゝを家ろ代　大津 寄月
梅いろ人のとき永やきろ代　丈芝
橋振まくんて後ゝるぬゝこ小　為雨
ちろろきや若て迷やろ猫の工　所角

射恒形ノ硯ハ鹿ノ足跡ニ似タリ

有高ハトソ通音ナリ山家集
ちくさの咲花のうつろふを見て
ものひとくさもちりぬるかなと

鹿

夜荻の咲をたづねて山荻　東本
人のもとめよりて
鹿のふむ跡や砧の影恒形　嘉能
鹿の子
ほのかなる鹿の子　土芳
芝草
宣城郡の荻や五月秋の花　桃隣
むかしをしたふ村雨　野水
ちるこの荻や刈りて稲の株　猿雖
芦の穂や点程なる夢こちら　丈草

雜俳諧

芦の穂ヨ葉ヒラ方やあの猫　ちり東
女中の草枕をたて
草枕や鼻の先なる京かたく　其角
園菜
菜畑に見あるる雪のくもり水　杉風
附菜ヨ葉ヨ色ヨ九月水　桃隣
秋種物
柿のなる本ヨリ住の安仁　利牛
義栗や笑ひなるる解の甲　秋甫
秋風や茄子の皮のかくるる　木白

甚五千て車よりとちの実の概　孤屋

あるかぶしの名を南蠻がぶしと
いふハ加藤清正世に聞ゆるつよ
しかりしゆゑなるやまた詳
なるつき天のそき、そくえ、ハ
あるとハ、ハ、おのかちに城きの名る、
人のもてはやして付くる名なるハ、
皆やきしかぶ名目ハ、泥の生れ付
の名つくるにハ天資自然の理、
けらく根也つの泥が根ハ赤きを

培カフ
妻ハ端ヨリ
健男スヽラ
催馬樂ニ後者ニ個ト名トアリ

うらかや石菖ハ根ハ根ハ根ハ孫の
ものの名ハ名なるハ、その生ハ、
ものもきハ、ものもきハ、ものもきハ、
のつるハ、土ハ根ハ、屋根のもの根
二世のつるハ千の日かけを多の
名ハ根ハ、ものやうく名を付る我
新品のものもきを多くハ
後ものもきハ大かくハかつく
髪つる樣のものもきをつ
つれなくひんかの根の口をつ
みきものもきハ、ハ屋ハ茶のと

黄菊

中庸をもちいる

石墨を磨する根こそ和庵辛子

雅堂

古撰えもふ秋の かるもき

大谷

原風呂の水山雲母の月の影

酒堂

碓ひくもきぬ月の白い水

芳号

秋の雲 いとしく かるく形なる方水

利雲

蕈物如以もも咒い時一点

支考

夕雲の汁に秋しる根こそ

如枝

すゐる秋に風ふきもちうもう

信徒

秋風を除やふるもの池の色

和名抄ニ雞冠菜 度利佐加
能利
紅色附名生

唐ノ白紬ムクシ角ノ〻セ　其角

冬之部

初冬

風や沖より立ちかのしきれ　支角
市中や冬の菜ものちれ不二屋　桃隣
冬枯の磯くるくるときらる　其蓼
稲穂や荒張もすけそこなふ　支梁
松の葉のきれ打冬の松茶　斜岌
灯蕈美の沖の雪ふるもの　烟寞
風の義ととまる小春　残丘

南宮英濃国ノ一宮ナリ

初雪や猫の毛よる立　春府
風や眩きけき猫の面　梦之舟
東宮山ま詣て　八桑
ふるふるの根ふまるる付梅ハタ　桃隣
幕見る雪の蘇鉄の雪さ　滝力
吋面
芋掘の後ふるふる初吋面　荊口
ふるふる沖の吋の行ふる　丈子
芝蓋蓋を雪ふる招きて
沖ふる程ふふ吋ふるの雪の庭　斜岌
ふるふるれ庭ふるれ　許亡

大木集にはなを宿を尋ねて
何ゆゑとはるきまん傳の留も
次やうなるより　顯昭法師

[illegible]

[illegible]

[illegible]

飯盛山ハ江刈甲賀郡

新古今ニ詠ミテ神ヶ丘ヤ
ふかけもなし 信敏朝臣の
歌の名くれ 定家

雪の歌 信濃国にて

杉の木の雪 紫式部の歌
朱の鞠や 伊勢人渡りの雪の絹
雪の如 出る色ゆ消ぬる
巖蕨の 横ゝ出る雪の 蕨
海山の 多の雪 雪吹の
江の船や 曲突 雪の 雪
題不知

為平 紅の 杉の毛 杉の
雪の如 粉糖の 白の 鶴
鶴の 草 繁 十 杉

文考
小枝
許六
洒夕
乙弱
素龍

羽黒七人
呂丸
芭蕉
許六

七十

白魚ニハ冬季ニ出甲子紀行
冬ノ部ヨリ即興感偶ニ任スニヤ

雪の 紫 の 白魚の 白 白 杉の 箸
白魚の 白 白 白 杉の 箸
楊の 雪 や 蛍 の 石 尺
庫中 や こ こ 雪 蛭 の 行 産 蛍
海 と 産 の 孫 江 海 で 里 外 乗
海 て る 蛍 や 雪 ヨ 渡 の 産
蝶 掃
蝶 掃 の 色 の 綱 て る 大 ユ の れ
す る 掃 掃 や 代 代 小
解 掃 や 文 猿 や 生 る 芝 猿 れ
山 伏 の 生 る 生 る 生 る 生 る 小

知白之道
丈子
孤兵
雪角
丶

苔蕉
万乎
聖坡
嵐雪

三十九述老懐宗長ら
同じくものこと考られハ鄙ゆをさまき
濟考カ
氣栄とし

紅葉地永よ陸ゝる世をなるく　紹白

紅葉蕃

ほとゝもきくなりこの一聲ゝ　杉丸
待ち兼る舞ハもたりとしの暮　李由
ちゝよ世て暮一羽とし　紹白
編ふくのけゞくしきよ多の暮　紹白
年の夜いとゝちゝとを絃ゝ　猿蓑
年の暮ゝ　こゝきき鄙きゝ　甲坡

花莊よりの文よ紅のゝいの形と
ちゝ　をゝ

飛て心ちさ　やまこゝり　李誌

杜牧詩ニ南山与秋色氣勢両相高
尾上ハ山頂ヲスなりハ而有ノ
納ナリ五元集ニハ杉をトアリ

紅葉地永よ陸ゝる世をなるく　紹白

秋ゝ部

秋の雲屋ゝの杉ゝ離れゝ　其角
おゝれて一羽海ゝゝ鷹　紹白
鶏鳴ハ日鶏ハ鳴ゝ貝吹て　仝
自のかゝゝ四扉の門　角
祖父ゝゝの実柄も養ゝ斗と　仝
ゝゝ　ふい丸ちゝゝ　紹白
下京ゝ宇治の茶畑ゝ一ゝて　仝
城ゝの茶ゝゝ茶ゝかゝき　角

編笠ノ節　諸説未詳

鈴縄ハ鰤ノ脉縄ニテ水中ニ下リヲ知タメニ掛ル物ナリ

大井川行幸記ニ貫之
月の桂のこずえまでまろ橋よ
りみゆるよしをひて云ル

宮ハ近江高宮より
蚋ブヨ
煮殿アブ

小本雀を薄ニ譬

説経浄瑠璃の説教ニもとゞりの判官ゟ標題一万治年間ノ印本アリ

其角孫屋各十六句

栗山子ノ句作哭人衆カ怠假令意

脚ニ四句ヲ連ニ句人情ナシ

小栗よりむかしさまざまの之　角

ちやうもんつく〳〵源氏の物　孫

孫屋物ちやうゟ出て源氏のあらゝ

四条屋句無表詞ゆゑ此詞ゝ如

天明氏無作

桃隣

ちんちり振ひ物ちて栗の木

ぶんと水の落る秋ゝせ　空坡

八月ゟ振いあんのうとすゆゑ　利牛

隣の物ちて相のひちかゝ　隣

翁ちゝ物ゝ物ゝ汲て見ゝ之　坡

そかい行脚トゝ之ニナリ

長谷寺ゟ九里ニ駒野里アリ

名所之

ちんちりふるの事

つゝちう降くるるのついやむ　牛

仏の名を知ちんぷるを知る　隣

ゝくゝを座を出ちくゝ足如　坡

年ゝくゝの我を住給めまし　牛

いつゝちをいい十月のちう　隣

春風ゝ六ゝ春ゝ釋立て　坡

月ゝなちゝ蛾の仕方　牛

ちんちりを聞て深るおうえん　隣

錢おちかり庵ゝゝ月　坡

時ちゝ氏多仏ゝ月の色の内　牛

明春ゝ来ておふゝ　隣

負ハ借ナリ

ヨリ年ハ織物ナリ

人のものの負ハ年貢ハ年貢ヲ也海ヲもすもるゝ
ヨリ年の織ヨ火捕ヲ事て
むかしの小言葉も見ぬ田ハ
罵ハて米て身辛ものゝ
物るりきりてるきりてるく
世ハの系ハきゝ秋の家
杉の木ヨ自かまくし
自ーも春の時のたくとそ
年年きをすきく蒙部布ハ結
よハやうな我ものよ占ヲ事て

坡
牛
隔
坡
牛
隔
坡
坡
牛
隔
坡
坡

正真ハ有ハ人ハシテガノ約タナリ正真ハ正直ニ同シ又古集ハ正真ハ其ハト云リ諸説紛然

冨田山城守治川際ナリ

きゝゝんこれハ何ハ如高ハ
性ものも肩よゝゝ如器ものて
京ハ鳥ハ家ヨ京ハ
焼物ヨ班金ゝる冨田ノ鮒
隔を濃ものて物ものて
數京ハ重隔ゝゝる田畑ものて
生沖を八ハ ゆる ハ舟
内てよう葉ものて也の隔
ものゝ隔ものの田畑ものゝ

神奈月世る海川ものゝ眞

坡
坡
牛
隔
坡
坡
牛
隔
坡
牛

苦蓋

割木ハ薪ヲ云

冬の夜一一ともしび

元和ノ頃桃灯ハ篭ニ紙ヲ粘シテ用

扨奏の原行の仮之文の書の譜
陸奥ハ やまとこ ゆるぎの
富士の煙の山路を引て行
けるよ自をかんるゝ
時和の俳を多くも数結の
割木の やまとの書
胴の多つきあるかけて
星さし 凡て五代二十八日
ひるまきハ陸奥軍の大きこ
泥奉の 雪と 雑 孫もきの
時ふるも 筆 桃灯を 消して

陸奥 砂屋 牛屋 坡 蓋

彫壁

元板ほりニ彫損スモツ〻ケ

鐵鬼ハ島人ノ異形ヲ云リ

第一ハ樓間ナリ

肩掛ふるる酒屋の書 業
上おきの平業きさむもうの雪
ふる出ぬ日暮 内て 庶まる
ゆ罠のちりをきつれて
塀よりいなる石十石 元
氏魚の鐵鬼ふ鐵ふる自を
砂ヱぬてこのうるる 書
彩畠の黨も蓋つく雪ふ
吹ふれふる笠ふよ 坊
川鐵一の昇しのあ鐵石雲が
平北の寺ぬ屋き義 坂

牛 坡 蓋 牛 屋 坡 蓋

ものいひ
諾ハ答ヘナリ

鯉ノ鈴縛ナリ

牛
酉
蓋
坡
酉
牛
坡
蓋
酉
牛
蓋

干物を日向のかゝ[illegible]て
塩出し時の節ホドくなり
筆用ヨ深きを[illegible]京住居
み沙汰なりよむなり　[illegible]
くくくと大海を雪の鏡
[illegible]のたのむ状の流きき
中よりて傍聾者の借いふ心
聾をくおて[illegible]ぬ夕自
風止こて秋の蛙きかり
鯉の呼なの[illegible]
ちゝゝと来ぬ物語の切なり

胴炭輪炭方炭ホ茶人ノ謂ト
コロナリ　四名句引畧

焦谷ハ仲仙ノ中ノ駅ナリ

目黒家の連ぬ[illegible]
[illegible]ものゝ自年一時ノ
輪炭のちゝを拂ふ去風

坡
酉
牛

雪の松をれ口[illegible]
日の[illegible]おの[illegible]ふ田空
下者を[illegible]丹深よ[illegible]て
[illegible]大名の供
[illegible]
[illegible]相地
焦谷の堤きれる秋の水

杉風
孤屋
芭蕉
子冊
梶餅
利牛
貸水

稱ヨ子の義ハ稱揚茂ルヒ
中國西國トモニ分限者ヲ手
前者ト云

際付ニテ汚レヌ
入ラスルヌ

苔ラ〻て鯉節賣る　堺坡
二三尋余ほもふ門の物　珊
るの余の物のもくる干ものの　水圓
外の皮重ねこる度の事て　石菓
稱ヨなのきんるのもくく　松風
ヨ吉者のひくもくく風浦の秋　坡
ものくく風邦のもる色を　利合
育くの自をかこて船大工　依ヒ
皆中ノの自ものる城ニのゆこる　隨
菓蓋のきいつく工ヨむもて　珊
川こふ重ヨ小船いふ　すふ

菓

ときハ八郎ヲテナリ
雪舟名、芽揚雲谷寺ニ住ス
入大明ニ帰朝、後永正二年寂

牧畜を以て業体とき結ヨの事　風
皆戸一四ヲ出ハ切ふ　水
物おすの口ふつくと釈ふ　風
取集めて多き精進日　皆良
餅米を搗て俵てかり込　隨
ふもくくふもて菓代の褒　依
重毎てをくを自慢をもし　沾圓
博一約て大をふて事る　珊
又ヨ彩る仏の飯て地獄ヲ　牛
扶ヨ物ふくて加一二新ヒ　風
大坂の人ヨ事ふる事の自　合

オマヘ
長前ハ一向宗ニテ佛壇ヲ云リ
唾ツ嚏ケリ

藁草餅ノ用意ヲケリ
十三名ノ句引畧

酒をとゝのへ八祖母の霧はへ
すゝけぬるは雲の篠をとけわら
次のお新屋でつゝむ雲の
弱雪をわかみて居れば嚏れ
ちんぴのこゝろ不堅篠ゆる雪
むるゆるゝゝゝゝゝ不堅雪で
男まゝ雪に蕎ゝゝ　一ゝる

坡　珊　牛　京　他　餅　水

賣表之義

元禄七歳次甲戌
六月廿八日

撰者芭蕉門人
志太氏　野坡
小泉氏　孤屋
池田氏　利牛

諸諸説紛然タルトモ詞書ニ
考ヘ合ヒ上つゝ下てやそ
嬉くも流涙をあらうなる
柳さたに行らもふ春もきよ
らの春も年一ゝ志くらう
つゝ春をゝ春こゝ行れそトア
リ附会ニ及ハシ

續猿蓑集卷之上

八九月宋之面深一柳一うの花　芭蕉
ものかゝもの畠刈る聲　沾圃
初荷ゝる宮ゝ宮ゝ雨後の月　馬莧
内ゝゝ　つく晩のゝる　里圃
きのふ　ふ　ゝ　ゝ　沾
物背一ゝ　ゝ　ゝ　蕉
涼榜ゝ　ゝ　ゝ　里
除ゝ　ゝ　ゝ　莧
猫ゝ　ゝ　ゝ　蕉

生憎ナル　附意

憎を　ゝ　ゝ　ゝ　沾
野原の　ゝ　ゝ　莧
十里　ゝ　ゝ　里
笹の葉　ゝ　ゝ　沾
ゝ　ゝ　ゝ　蕉
いつくの　ゝ　ゝ　里
ゝ　ゝ　ゝ　莧
ゝ　ゝ　ゝ　蕉
ゝ　ゝ　ゝ　沾
ゝ　ゝ　ゝ　莧
伊勢の下　ゝ　ゝ　里

白氏文集ニ北風利如劔
京ニ羽ニ度沢の泥ノ向下又黒
谷ヨリ鹿ノ谷（出道ニモ同伊

芋粥ハ山蹲の仲ヨリ
くるくるとそこの嘆るまそ
祝をハ一日ハ
椒の蒲のうてぬ　費（ヌキ）　宛
濱芋の牛ハ法をとくこと
ちかぬ蝦ちかく
自結ハ伊勢ハ
籠の茅ハ名ハ
もれて栗も板もむく
俤ハ
削ハ芋坂の

沾
蕉
里
芎
沾
蕉
里
沾
芎
里

タヲヤカ
嬋娟ナリ　静ナカ　体カ

小雀山雀日雀四十雀五十雀
云リ

多くくハ乳ル事ナリ

ますくハ星のうれかゝ
引ハ
ちくハ
ちもちもハ
濡かしらるる
蕉
沾
芎
里

カラ
蔭の字ハ
ちり葉の茅の
立ハを
ふくくくハ
雲雀くくる
馬莧
沾圃
里圃
芎
沾

敦賀郡

なるかりこ弓場り書損ニヤ

延を蒔てかの洗足　里
梅一さいふの一歩のうこちゝ　苑
清状ちんてきた　ゝり　沾
よをきるる第のてを家ちゝ　里
ゝ場り一ゝる国方の　苑
ゆうも形ゝてをてゝ約迎　沾
ゆゝるきのゝ不稲の種の自　里
毫の秋の紅ふ紅ゝて　苑
座敷のむちと女房ゆう　沾
ゆゝる伊勢の幸渓の等蓑　里
蓑をちゝくゝの見の一紙　苑

布漬（カセ）ヤリ

三崎ハ能登敦賀ハ越前ノ国ナリ

後来もちゝて生きを如蓑　沾
先生ちゝのちる竿の涼　孫（カセ）　里
蓑の設ゝ雪を掛湖一　苑
志ちゝ白点て知ゝて居る　沾
年ゝゝ有ゝちの雪を弁ゝる　里
ゝ時敦賀の蓑ゆ蓑ちゝ　苑
汁の蓑ゝ二ゝ蓑ゝの蓑蓑て　沾
ちのゝ蓑を中川てゝる　里
ゝゝゝ寺ゆ指圏をゝ走一　苑
度の侯立のちゝ不湖一き　沾
紗かりてゝゝ丸ゝのぬゆ高　里

いさゝか主の句菊の吟に霰ふるとあり
同葉に里圃に与へ玉フニヤ
草枯鷹鳥眼尻

畢竟して彦三郎料理ふる
紀つて秋のすゑつかの雪の有
新まち花ゆく玉笠の高
比叡を雪の毎の所ゆ四
月付て行出羽の産内
主の志れく修行付の菊ひ
少て菊ほゝを移苗の色
ものかけ菊を主一緒の苗ニ
所ふる田の土のかゝく陽矣

芭蕉
沾
里圃
芭蕉
沾
里
芭蕉
沾
里

いきみ主雪引ふる嵐ふる
里圃

垣ノ柾ノ霜ニ凍テ嵐ニ飛ニヤ
又解ノ薄カフトモ
節榑カ

元板ニトアリ一本頂トアリ

智恩院、京都東山浄土宗總
本寺ナリ

あのあをの雲をうゝ
大根のそくぬをつゝ
以下もも 軽薬の玉 秋
町初ふ自元の所ゆめ紙
花のそくくを竜る 言 歌次
智恩院の碧りの柾りて
きくくの陰ハ概 ゝのやく
姐の鹽ゝ水をかけ添
目利て家ハよん著ゝ
状著を 駿河の高師 清れて
まくゝをゝをゝ如日の新

沾圃
芭蕉
馬莫
沾
里
芭蕉
沾
里
芭蕉
沾
里

和州平群郡（ヘグリ）

柴舟のハ色ニ通フ

一本漬ニ作ル元板古集弁トモ
賣ニ作ル

絡線中古ノ俗字ナリ絡孫娘（ギスメ）
ノ誤ル誤ル一葉集ニ蟠ニ誤ル

芦の葉ふくるの時の淺ちをう
仰弱蓋きふ弱とうめる
うき松ハ賜をつれを淺うを
芦ふ的をうをうをうをうを
柴舟の葉の中ようはつをを
板の像一門をあてをう
百姓よりて苦るも苦きよ
うめを猪ふ的のよめ行葉
賣和の淺紙てこおろ一番
ひふの暑さハそうこよ
沙をを遠ふ棘の中の絡孫の葉

芦
沾
里
芦
沾
里
芦
沾
里
芦
沾

仰ハ今ノ仰山ナリ古言ハ希
有ナリ

不猫蛇ニ此花ノ句支考カ竄
入ノ趣ニ云リ

ふをを人ら云 生をを 注
火性の古いけて猫ふ紙ちふをを
一名ふうう一雅（カラウス）の 末
ハ〜〜ハ実日の部ふ天葉を
仰ふ加減の東ふ部ふ
自かけふを〜〜烟ふを級てふ
おをふの中〜〜不早婚て色松菅
ふ拂ふ婚をやふて婚のさく
葉を葉の部をこうて仕立ふ
ちの部をふ一の方ふおを〜ふハ
寺ふけふふ山孫の毒

里
芦
沾
里
芦
沾
里
芦

續猿蓑ノ題号ナハ無卷無集
の卷首ニ出スヘシト諸説アリ
無住法師ノ雜談集ニ曾ノウ
ツヨツフクトアルヘシハ
猿ニ対シ言ノ名ノ名ノ名ノ
猿ニ対シ言ノ名ノ名ノ名ノ

昼寝古ハ雜ナリ

みちのくの山の端の月
一百降て行くくれぬ　沾圃

猿蓑よりもれくる雲の杉の戸
ねぶの花ちる野寺の昼　蕉

水のうへ池の中ゆく月の影
鐘行きもる雲きのくく　支考

鐘行きもる雲きのくく
鳴ちるとやうて雲の月　性然

鳴ちるとやうて雲の月
月のかたぶくふかき秋　蕉

蛍ちかひ一ちて去きる船の魚
夜ふかき海の鳴きもてうかれ　考

夜ふかき海の鳴きもてうかれ
蕉

二ツヨ
覚ルトモセヌカ

是ヨリ他季移リニテハ句ツ
ケリ

二井寺ハ紀州名草郡ニアリ此
ミカ
彼岸ヨリ早ク花サクト云リ

一本ニ多くは誤ル

聲ちかてる月もまぶかふ物語
中國よりの状の吉　左右　然
朝日の月もとこやら振舞れ
一重羽織り失てうつぬる　蕉
きぬぎぬ朱き蓼の根　考
山の門ちる月の舟　他
初あらし島のかげ寒　蕉
ち深さる濱の小鰯　考
ぬてあるる紙三井寺の月かり　然
蕉
蕉ちかひうるはく永き日　蕉
うちかの又一ぬまより北又ちり　考
然

節なれハ兩釈ノ命日ト云リ

糸を脈を太くかくなる
後峰の内義ハ多度百度かく
然
嶺嶋のさくもわさとさくる雖如
蕉
大せつなりの日ハ二百五箇の雪かきりけ一中の源を
考
雪かきりけ一中の源を
然
蕉
考
然
蕉
考
然
蕉
考

大ハきくハ鑿鋸ホノ音ナリ

賦ハ鋪陳ナリ

多年雖をつくりとかくとなれの風
然
大ハきくハの奥よ少ゆる
蕉
宋橋もにふきりとそ吹る之
考
くくり多て市の中を押ひろ
蕉
洗ひくり海生ハ物のけるなくて
然
略のひくもの多くぬけ出夾
考

今青紙　野盤子

支考

今青ハ六月十六日のくくり歌かくハ

林氏詩會及裳湖水秋

三八くハ屋ニテ頻数ナリ

強ノ字

阿果ハ翁ヲナミテ云

自ハ東方の紅ゆるかゝけて赤裳ゝ
湖水の秋を染くむされハ之雪の遠い
き雲ゝ雲ゝ芙蓉の峯をくゝ秋を
志川ゝ初て云ふ長沢人さゝ遠ゝ深さ
ゝて四囲の山を紅ゆるふ色ゝ
かゝゝ雲ゝ人さゝて金を無き
色ゝ雲ゝ秋のふ秋を知なゝ弁のゝく
ゝ紅ゝ色ゝ紅蓮の水よ志くこゝ
水の魚をゝ雲ゝ雲ゝ雲ゝ作り
ゝる阿果ハ源川の芙蓉ハ四年一の
ゝ秋を知ゝ初てゝ云ふ所自ゝ

白蓮社記曰在僧在俗俗而在僧者

莊子ニ君子之交淡ニ如水ノ

きの所ゝきゝゝて伊賀ゝ四年ハ
父母の古墳をゝ尋ゝ源の頃ハ山ゝ
松ゝ梅ゝて加茂祇園の清ゝ祭ゝ
ゝ人かゝて也ゝ山ゝ秋を知れんこと
異ゝ雲ゝ雲ゝの紅水の紅葉ゝ ゝ雲れ
かゝゝて中ゝゝ二四年ハ家ゝ清ゝ雲ゝ
芙蓉の峯をゝ雲ゝ雲ハ芦沼氏を
ゝ雲ゝて清ゝ清ゝ清ゝて
清ゝ知ゝゝ雲ゝ雲ゝの交知ゝ清ゝ
ゝの川の雲ゝ山ゝ秋を知ゝ
ゝ清ゝ秋ハ雲ゝ人ゝ知ゝ時なゝ

奥義抄ニ湖光

杜律明年此會知誰健

暫且 仮初ナリ

漫ゾロ

桃李園序罰依金谷酒數

何時ゾ

芭蕉

曲翠

杜甫

哲也

支考

芭蕉

翠

天文志ニ鵞高飛而定ニ天氣ヲ又昏ヨリ前ニ啼ハ日和昏ヨリ後ニ鳴ハ降ト云

蔓菁（タハコ） 又鵞

四方ニ石ヲ畳テ其上ニ仮堰ヲ作る酒槽ヲ置キ打込テ上ヲ平ニ成ル時ハ酒槽ノ表ニ樽ノ表ニ於佛ノ前ニ夕日ヲ受テ近年時々蔓菁ヲ蒔テ其根ヲ食ス秋冬ヲ引テ根ヲ切ル自ノ新屋敷ヲ作テ其ノ前ニ作る解四ノ方ニ高ク成テ西方ノ方ニ徳ヲ高サ

然 考 蕉 翠 高

大和

晦日前ニ昏ニ際ト云

夫風ふ雲清の雪ノ降ル
義ニ村ノ出ケるヲ見
時ニ移ル堺ヲ男ヲ口きいて
ゆる者の時ハ四伏ヲ
経ヲ樹ヲ付ける狭筵
巌ニ成る外自然の未
方宮ヲ成ル天本の所
隠の四和ヲ重の簗ヲ
呑ヲ絶ヲ紙ヲ酒の引ヲ
若ニ人の多ヲ舟ハ有ル
封付ル文字ヲ有る自の書

然 考 蕉 翠 高 蕉

臺ノ表ハ箇ナリ

鈍ド

花厳日記云ハ遺物ハ頭陀中ニ後猿蓑ト題アリテ可仙三巻發句四五吟ホト外ハハ書捨ノ反故等入トアリ此巻ノ中何レカ三巻宮眼入ナル

考 然 翠 高 徒 考 高

ぞろく ぬろく 巻の上 臘龍
出義約四角の角の川原所
高沈を ぬろく 表一箇
ぬのろく 猪を見かく 格の
大きな 猪のとんと 少ゆる
巻ちろ ちろ 廉なしよせて
猪うけ 猪し 蓑松の下

孝ろ都

笠掛

湯石の ぬろく 猪 初さろ 露沾
海可多ろ 又ろ 白ろ 初さろ
蓑ろ 初白 蓑ろ 出ろ 初掛 其角
出ろ 出ろ 木の 殺ろ もの 凶 苣蕉
角 ぬ し 人を かろ ちの 友 洞木
ち 苣て 出ろ 蓑の ちの ちろ 太ろ
出 苣ろ 酒 ろ ぬろ ろ 酒坐

享女君ノ故事ナリ

德ノ人ナリ

興

飛鳥も破のやまされよ異に生くらく

ね

海部の琴の音せよ雪の音　惟然

結うて降出さるうらくの杖　支考

人の家もかく窺ひまちさくの

星さるやゆき年の夢の北面　沾涼

ちらちら雪かるる女中ぶり　猿雖

ひるるところ切ふぶやゆきくの　伺和

咲ぬとおつりーけちるる赤ぶ　乙孤

家庭や本うえ重たちう掘　本鳥

二の掘やまくふ吹地鯛の鼻　沾荷

子珊

義仲の墓よ沢くまくふ　卓袋

田家

蒟蒻の名ばくくん山まくふ　李里

咲ぬるるもやや飯米五十一石　梶音

山ちよ蕎麦のくく木のやちり　一柳

ちうま木の根やちいくちちの跡　如雪

ちを笠を見やて秋ぬん人い淫　其角

ちれやうよ麦麻生代ちの去　少年一雪

めり生代墜のたりやち軒のち　卓袋

一日ハちえのたちや旦雨寺　沾圃

ハ生まくふ寺ちうる赤ち業

、

五元集二宰府奉納守梅の云々トアリ

梅の葉

濃梅や蔦こまやかに古郷の　芭蕉
葉の焦も世に古の葉の色　曲翠
夕波の影よ蔦の葉の色　孤屋
一株の杜丹の葉の葉の形　屋頭

梅　附柳

青柳やくりかへしの水の上の梅　芭蕉
衣更梅の大盃梅の花　理水
古梅の和布の業の苔麦　其角
里坊に雁きゝやうめの古　昌房
投入や梅のおもハ義のたう　良品

梅信の花ちく梅のさくら　芭蕉
ひらくらしを望の面さく宝　梅の香　百子
梅の香や梅の香ちて下駄の紅　魚日
古ト梅やくゝ　かなかなきひのうち　子川
庵ひら梅の白ひをうて義ん　大丹

天神の社に詣て

梅つけ　梅の　顔　拾糸
ちれくの鉢のちりや梅　柳　千形
咲くハ水ちるハ川柳　春元
江東
匠屋城ちゝ　ちうゝ　古柳　李由
梅の古ちれくの　の曲　九蕉

[illegible]

和名抄ニ倍羅賀俗謂ニ保呂羽
保呂ハ保呂寺ノ略言ナリ

[illegible]

鰰を釣けてる爲の圍ふ柳　巳丈

鳥　附魚

[illegible]　其角
[illegible]　史邦
[illegible]　智月
[illegible]　芭蕉
[illegible]　去來
[illegible]　涼菫
[illegible]　傘下
[illegible]　七紅
[illegible]　北意

西河

[illegible]

[illegible]　少年　[illegible]
[illegible]　槐市
[illegible]　河點
[illegible]　釣筆

芳野西河の鮎

鮎のこころさすがに涼の名
功美とせこちぶつく小鮎かな　土芳
ちぶ魚の一かくれやゆ多ること　圃水
白魚のちりぬ岸も洗ふ波　子珊
　浜川を抜いて　少鮮
白魚をちりぬ岸のそこ四つ手　其角

かれ香觸ケン

蘆蒿（ヨノハキ）又鷄兒腸トモ俗ニ云姙菜十二

春草

ちくさのも萌そめにけり春の野の
若菜摘やはるけきこゝろ　摘の花
春の野やいとれのそのゝかすみたち
川淀や淀をやまもる芦の角　正秀
雪のあしたるやさ芦の先ちらし　正筋
紅ひや梅の若芽よりうもき　尼羽紅
蒲ちる候深のものも鬼ゆのこゝ　猿蓑
堤ようちうひ蕨れいまれうの　寒指
路跨く土堤の切目や蕨のたう　車来
雪後の形ちさく出た根　蓼花
乃就

山城宇治郡

そくいぬハ浦ちゝ　まねく

早蕨や笹ちり　その枝ちり　正秀
時雨彩の白ひて　狩ゝ蓬ゝ　夕可
はのかけゝ　猫の抽出　猫洗芳　一桐
蒲ゝ美や　蓬ゝ　園菊

猫恵　附胡蝶

春かけや白ゝ　枝ちく　猫の恵　摘花
ちゝ恵ゝ　ちゝや猫の盗　支考
思ひ　猫ちの里　猫ゝ　三ノ　巳百

白ゝ恵つゝ

ちゝ　如ハ　動く　胡蝶　松柳
花天　花　胡蝶　蝶の　蝶然

妙福ハ冥福ニヤ又妙福ノ守トモ云
モ支ハカノ書損ニテ丘カ
千刈田ハ住吉ノ御田ヲ云
良文集拙花水色渾ヒリ

桃ノ脇狂言ニ比諭セシリ
阿弥陀経ニ彼佛光明無量照十方
国無所障礙トアリ
蓮如上人御傳ニ小服綿ヲ常ニ召
玉フトアリ

金柑いまく紫りく 柳の茶
伏見こうと茶種の上の柳の古
柳さくく中をもるまく柳の毛
茶さきふ柳や京蔵の御頭
江戸の書面の袖文の恨四の生ま
玉のく陸文記の裏白う弥陀
の茶屋とはるも
小紋綿ふ見をやらもを玉つまき
種ハ柳て春ニ咲柳くの
取ひけて春るや柳のるの宅
ちう柳たちうちうまま陸て春る

何我
雪芝
水酌
其角

角上
弥吾
湖舟
雪波

[illegible]冬ト古来ヨリ用来トリ
七夕ハ生ヒハヤウシテ出ベ
シ[illegible]

歌名附躑躅藤

[illegible]や[illegible]平[illegible]藤ひとく　寄花
　　因京の人を對して
山[illegible]の[illegible]の[illegible]　泡堂
[illegible]おくれ[illegible]の様や[illegible]の[illegible]　雪芝
藤[illegible]や[illegible]藤[illegible]の[illegible]　荊口
　　春月
山の[illegible]を[illegible]の月　長時　魯岡
　　春日附春雪　惟
[illegible]の[illegible]の[illegible]　荊口
[illegible]人調[illegible]合[illegible]の百　乃[illegible]

鶉鷄

昼記ニ法雪水絶ニ似名ハ九ヘ
シ淺作ハ誤リカ

[illegible]百や[illegible]の[illegible]　[illegible]
[illegible]の[illegible]を馬ヲ武江の[illegible]
[illegible]対

[illegible]枕[illegible]本　支考
[illegible]百や[illegible]の[illegible]鍛冶ヲ[illegible]　桃首
法[illegible]百[illegible]進[illegible]の[illegible]　[illegible]
[illegible]や[illegible]の[illegible]石の[illegible]　風睡
　　汐干
[illegible]帆の淺[illegible]汐干ハ　支考
[illegible]の[illegible]の[illegible]汐干ハ　[illegible]
　　雜去

墨ニ入ル墨ヲ去リ

雀ノ名ハ草木ノ名ニ立ヲ去リ

小字第八元録以ノ小唄ヨリ

出のうら や氣高き加賀
笑ふや まくさ 越ふる 相の浦
思ふの 杉のそゝろや 笑みとり
陶器や 巖は 猫のあけちゝ
少年 名 金色のうれや 緋法の衣
寒 毎り 猫法や 雪花や 市ヶ平
木の芽 高 花かくれぬけ 毎り
高の 山 花の 水 中の 小 高 節
高天の 鯉 高 ぬる 高 高 の 池
引 高の 中 高 交る 花 四 高 一 元

三月雪

許六
紀嶺
土芳
配力
万乎
芭蕉
三月 柏水
山秀
仙化
支考

蓮ノ子 高 空 集 二 入ル

螺 海鹿ニ似タル 三 螺 香ニモ用フ

詩 脊風ニ東方味 鼠 顛倒衣裳
顛之倒之自公 發 之

鏡裏 梅ヨリ 翌羽 粉骨ノ歳旦ヨリ

歳旦

芭蕉 白 海 高 の 名 鉢 うら 高

芭水や ゆ ま ら つ く を 蓮 沐

蓮 高 ハ 年 の 雪 の 立 所 高

雪 や 雑 高 ら て の 星 つ ゝ 丈

芭蕉 の 見 て つ ら ひ 年 一 螺 の 貝

母方の 紋 を つ ふ ー や き ら を 始

ゆ ま い る 右 巻 を 歳 伝 ま ら ふ

つ す と 老 父 の 文 を 高 鉢 一 ゆ れ ハ

高 や 拍 洋 き 衣 の う ふ ゆ て

人 も 人 ぬ 高 や 後 の う ら の 梅

支考

武仙
少年
石巌
尚白
圃落
山隆

二川
芭蕉

山井三栄具考るに[illegible]
[illegible]
[illegible]

陸佃云陽散陰為霰陰包陽為雹

朝熊山勢州

文今集ろくぐつぞくとんちく
きんぜのろくろのふくく秋ず
きくよ

葛西武州

霰の雲をはらふや　子規　甚角
時雨ちらすや洗水の音　清厚　丈艾
ちぶ濱やはをの本葉ゑ　時雨　百氏
子規ちるぬ松ちゝ　鶏鳴山　文考
時雨のあるやちりぬふる　坂　如雪
菊の庭ゆ　むかしぬおくきぬ　芳年
濱ちるも陸田ゑはけこの一部云
岩ゐ花山の墓ゑて巡礼の
時ゝてゐるゑ
部云かき時の森やゆもちり　沾圓
本附芋花

五葉集ニあせどろ其ゑを古ゐ
ちさくかうのくるの歩ゆひ
てゐるゑも衣通姫

山燃ゆ

接和ゑ　ゑ　ゑ　

[illegible]

[illegible]

[illegible]

三才図會ニ無花果ハ一月而熟ス故多ク假名シユクリヂクニ非ス

和名抄ニ鉅性況伏而在ニ石間者

懷中の懷子の形　許六
ふる角ふるの形ふるハ　聖萩

秋深

ふるしまの外ハ行義　宇殘
せる無果や廢寺むかふの深　性然

深川の庵ニ宿して

ふるの寺や秋ふるの鐘深し　史邦
深しさや加茂を出て鳴る鹿もあり　重茅
石ハしや裏つゞけてみすゝき　杜年
ふるしまの牛の尾振て川の年　万年

漂興　三句

孤舟中ニ深を漕るゝ　洒堂
深しまの移りに鹿ふさけ　支考
生涯を移ふるの深りに　重芝

ふるの寺出ずに秋のくれ　洒堂
深カ
ゝ
ふるの中ハけふ深ふる　支考
ふるの人今ハ深く永　重芝
黙禅ふるる深や石の上　洒堂
磯人の性ふるる久ふる　土芳
深しまの一年の秋の風ふる　我眉
秋深や物ふるの世八月ふる　里圃

酢漿草（カタバミ）

盛夏

かくとゝや思ふ事もし庭の隅　聖菊
李盛る瓦世のわらうの器　東　乃年

義醫者の器めすれしる
蓋に作る

宮もと入請て蓋作の器さ永　正秀
元著の内はたつまや　梅つの氏　乙朔
惜さうる日盛作つ　春　仙　怒仙
花ゆふ塔も志ゆふ此器さうれ　尾張　嘉兒
茅の戸や器を自ゆうかつて　我峯
器さるや面をめさ寸るものろう　仁苦

え板雨ノ字ヲ脱スヽ今補之
小文庫ニ素のもゝとアリ当年抄ニ論ヅリ　病藝ノ塾宇百氏文集ニ出

猪あけて器さらやまに蓋のれ　卓窓
粘ふ蛇ふ蛇の石つをうる　墨東
主ゆれいむつと瓶落の器永　沾圓

休のふ

筍ふぬきふく岸の窟ふ　ゆ
器休や懸のいふ庫金の亜　一の滅
　　世翠

正月西附久立

ふ蟹や蟹ふ蟹ふ徽百の年　不玉
さみふ永や一番ふ素の　如　苔蓮
正月百や蟹ふ蟹ふ瓶　沾圓
久ふふ　年ふ日　鍬　掛俊

白や　茎の葉　あく汁の芦　　苦蘰
又　ちらちら　かけ　る　水の波　　啼鳥
ぬつ　ぬる　傘　ぬる　ぬや　まし　町　　圃水

蟬

白や　中　あり　して　梶の　葉り
きつ　こ　葉て　ぬて　ぬて　ぬて　梶の　秀　　西秀
森の　梶　梶　ぬ　葉や　ぬる　ぬ　葉り　　梶故
梶　ぬて　ぬ　布　織る　空の　蕾　叶　ぬる　　て那
ぬて　ぬて　　　　　　　　　　　　　　　　啼鳥

蘰の　目や　涼　ぬる　ぬて　ぬる　艇　　蓼掛

雜夏

酒帝

飯籬（クカキ）ニモ作ル

星祭　て　ぬの　軸　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　　杉枕
宮の　ぬる　反　茅　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬの　細　　荊口
反　庭　ぬ　ぬ　ぬ　ぬの　中　ぬの　ぬ　ぬ　ぬ　　如去

川杉　ぬ　ぬて

ぬう　焼　ぬ　ぬ　ぬの　ぬ　ぬて　ぬて　梶　邂　　文鳥
漂　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬの　ぬ　ぬ　種　　菅笠
夕　星　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　　水鹿

せ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ

慈姑（オモダカ）ノ字ヨロシ

晋書陶潛傳ニ潛晝ニ臥夏月高卧北窓之下清風颯至自謂羲皇人　箪和名抄織竹為器

計六日箪唐土ニ有事ナリト三草紙ニ登宋の華ヒとアリ

ヒすゝハ便すり

深沼や道はすがらるる百のあと　地蓋

鶴半角引蓮のそよぎ　水鶏

雲の渕ひをうらやむ

雷形ヒ雲一雨の嘉ヒ　箪　芭蕉

秋ヒ来ぬ蓮ヒ初ふる雲雨　水　牡然

蓮信のくるしこ雲の雲ヒハ

雲くもりあまよ雲の雨

深ハ雨箪ヒて世ヒ交ふ

蛙ヒの鳴りしハやヒ　鯰ヒ百　文秀

秋の部

山家集ニ月ヒすゝヒ

西行上人初稱ニ大實坊圓位

渕ニハ水ノ遠ヒり

名月

名月ヒ蘭の雲や田のとり　芭蕉

名月の為かとえて跡　扇

ヒ一ハ伊勢の宮ヒて名月

の秋ヒう二月ヒ年ヒ年ヒて名月

遊いつれう嘶ヒ人を待ふヒ出ヒて

名ヒて月を出ヒ高ヒ雲ヒ

ヒれヒうヒうヒうヒを初時月

名月ヒ園信法師のヒうヒれ

蘭ハ雲樓ヒうヒ水ヒれて平田

渕くヒ墨ヒ多ハ老杜ヒ峰

老杜ガ唯雲水のミハ稲穫空ニ
雲水川平對沼門ノ誤リナラン

古今ニ秋の事て月の桂の実
やハらかなる光りを光とたとへ
たるなり

東坡詩ニ春宵一刻直千金花
有清香月有陰

雲水のこなたにいくるるまもなく
なりゆくその沼の門をしけハ言
葉舞てんまをやをりいそく
方のこのむ所の名命ハ依ていん月
のうるおいこそ光りをもとも
ちたれ斗りをおもひやをあれハ
為ハ清兵衛ハ自ハ陰りて
光も詩歌の道ハ知れたるハ
前ハ嶽濱をむ福ち一法ハ凡ハ無
をもつたるを善ハ行を光ハ
をたるをたるをたるをたるの人

田蓑島ハ摂州

闘諍ス

支考評

名月の清ハ清ハ田蓑ハ
名月や雲ハ雲ハ晴れハ雨ハ
ものくの花とそれ自ハ
ものくの花とそれ自ハ
名月や考ハ考ハ人の
名月や考ハ考ハ人の
名月や五科ハ五科ハ
名月や座ハ座ハ
中ハの梨ハ梨ハ
酒者
め約
変法
名自
雪指
法業
不玉
祀力

をゝの松ハ斥候松より

帷ハ舟薄シテ長キモノより

名月や茶の湯ごゝろ有きもの　古松
月や茶ゝの松よ人もなし　園水
おもむき茶もなくて茶やるの月　山樵
月や茶の湯ハ酒ゝ清水沢　尽國
名月や四ゝ人寄ゝ禅　舟
おかゝ〻ゝ宵の月も四てこゝん　雲笑
月よかゝゝ墨の衣　重方
仏前の四ゝ行て月の　沢芹
庵をおもひたちゝる
二度まて庵地ゝる月ゝ　支考
ゝ〻茶を畑ゝ行ん月ゝ　宝丈

古歌ゝ月ハ夢ゝよハ消ゝく
山ゝのかけゝゝ月を言ハ忘れ
らゝ

三老女ハ姨捨檜垣関寺より

月の名の月ゝ茶ゝ月ゝ月ゝ　如雪
山ゝのちゝも森の月　宗比
名月や里の月ゝの書ゝ家　木枝
月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ遠様　利合
名月や茶ゝかゝ月を女中方　丹枕
月や何も月ゝ月ゝ教の月　玉蕪
月入の月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ　正秀
淀川のゝゝゝ月ゝ
月ゝの月ゝゝ月ゝ月ゝ　丈艾
月ゝ月の月ゝ月ゝ月ゝ　墨概
月ゝ三老女ゝ月ゝ

沾圃、寶生左矢

川上、葛飾の素堂ヲ思ヒ玉フニヤ

七夕の盆の祝ひとなりぬ

煙撥を雲の彼方なる月

袁氏が月入れる瓶の底紙

芋かづら月まくるまで掘りし

月夢氏淵の吉野も彼下

源川の高き車にかつぎ給

きて

川上と洪川下や月の友

十六夜ひろふ雲のそこの

いさよひの雲の名残の蕎麦の

沾圃

馬見

黒糸

牧童

苔蓮

、

猿雖

神中集 薫姫 芳七姫ノ名

七夕

天の川やあの田のあのその川

星合とあくるあて流れ船

永形の雲ふかく色星の新

古今ふる秋いかに彼星の

彼風や墨堀の岸の柳

立秋

栗ひろ彼方ふるさと秋の

秋ふる中ふる中ふる中の軍

秋雲

彼方の色遠ふる秋

蛙然

涼菓

東湖

沾圃

乙刃

寒川

芳次

柘榴

調ニテ年ノタケタケ云
越中婦負郡楊坂ノ社ニテ女ノ
男持タル数校ニテ打ス
弓固ノ圖

蹄革ス

ツマ子花ハ鳳仙花ト云
小文庫ニハ玉ノクシトアリトス
史邦ノ自撰證トスヘシ
枕草紙ニ　このまろこののそひらくく
けや　所のみるひともしはい
かなくくる云云

御子のもとに奴枝柳のつるく水
女郎花　福山の里の婆うれ　酒ヲ
ちとせ　一形坂の杖よりくれな　馬蹄
一節ヲ茶碗ヲ巡リ昌ノ　鳥栗
弓固ノ　ちいれ中友ちま　支流

賤苞蘆

ろ君ちる芳是雲城張ら命水　風麦
ちま雁のちまるる所一ツ福也　史邦
枯のめる家ハ物ら也弱ル也　万平
移ル也ヤ所の身ら所形高ら　苞蘆
移ル所のちらう志ふ如ル数ル　至晩

去来抄ニかくのあくくなりく迷
云つるすものまちふしたるくるハ
此句カ

其角カ句芭野ニ菊ノ露トアリ
書損ヲ正シテ再入ニヤ

慣習抄ニすんなりのもをを命るき
るくしの綾ヒかふくなるをかなり

ねしくやあるるるる萩の露
芭蕉の葉ハ秋ハ枯れ秋ハ枯
山人の宿を出れば芭蕉ちる
秋毎ニ紙ふくうり芭蕉ちる

秋良

多新の蒼ハ芭蕉自ハ
蕉一の遠ヤ芭蕉ハ柳ら風
水ハ　風ら芭蕉ら湯の月
秋ら芭蕉ら人ら鑿帽ら

虫附鳥

きちくしの綾ヒ芭蕉ちる

雪芝　尚号
カ山中　柳妖
杉下

田上尼
雪指
風麦
其角

女
可南

基俊

富馬ハ兩名一物ナリ

蟾蜍やとりて傷のト加筆ア

富馬や蓑よりつくる笠 柳 小枝
火の消て烟ばかりの虫の蓑 正秀
秋の夜や夢と解るまでの間 水酌
蓑虫や所よ所なし一寸の秋 杜若
蓑虫や行の味ある笠一の皮 探丸
蟾蜍の絵をこの石のと 芳雪
蓑の蓑よ蓑きくふん蓑の蓑 示峯
なかりかるよ蓑ひて蓑る秋の蓑 丈芝
蓑の蓑よゆとつく蓑の蓑ハ 馬莧
蓑蓑や蓑う蓑る白川 水国
栗の蓑を蓑る時や蓑 蓑 支考

なのりそよつぶを切ためあり
らなくおもひ出るけさなるの蓑ん
少將尼ノ歌の余情そ蓑シ玉ヒ
ト入日詞ニアリ

かくハ風聲ニテ人をらあるーカ

稲の蓑ハ稲妻ニ同ジ

蓑ものろ蓑ものろ蓑て四十雀 芭蕉

秋風

秋風や二番燈籠の移せ時 涼力
蓑ものの蓑も蓑ものの秋の風 式之
蓑ものの蓑ものの蓑ものの秋の風 支考
蓑の蓑や西まるも蓑の秋の蓑 風國
蓑ものの蓑ものの蓑ものの蓑 風蓑
蓑ものの蓑ものの蓑ものの蓑 九蓑
蓑ものの蓑ものの蓑ものの蓑 猿蓑

稲妻

稲の蓑の蓑の蓑ものの蓑 少年 一東

電光石火ノ間モ無明ノ闇ニ迷フ
世態ノ観想ナリ

ツヽく
圓ス

稲妻や雲ヲ離るゝ海の上　宇治
明るかと稲妻寒し二ツの鐘　土芳
ひらめくや実の中の五位の影　芭蕉

木実　附菌

赤栗の実て有りけり西の方　丈艾
炭焼ヲ消柿ヲ盗む侍ひ　玄虎
秋雨や日和ヲ待ツ柿の色　泥堂
法ふくゝ茸もまゝ板の上　立圃
初茸や濡ヲ濡ル一夢り　沈園

伊賀の山中ヲ行脚の時
詠ジテ

道旬ニ伊勢半從ヲ山家ヲ求メ
テトカヽヲアリ墨ケヒ故省之
ヘラツクトアレト忘梅集其外
付ト文字ニアリ付キヤ

畑ヲオコシ作人ヤリ

松茸や高ク上ル山の形　惟然
松茸や古ク枯木の葉の落ツル　苔蘚

桃

渡ルの塀ヲ古れヲ村名葉　北鯤

鹿

鹿ヲ目ヲ枝の花や風の吉　風睦
鹿ヲ鳴ヲ花おくれ子ヲ引ル　一竹

農業

郭ヲ人ハ通ヲ蕎麦の花　車庸
本の為ニ種ヲ蒔ル　冥山
ヲ蒔ル畑ヲ鶏の稲　如雪

寸胴

江戸大塚地蔵坂樽次ハ池ヲ大蛇
住底深ク酒戦セシ大上戸ナリ
慶安年應ノ頃ノ人ナリコノ樽
次ハ底深キ故カ
西ハ上戸ハ頭ヲ呼上戸ノ異名
ニヤ

伊勢の斗酒なほ辞まじと云れて
菊を見ては酒飲まずに居られず　芭蕉
花を折て髪つきなやかる性　乃武
山賊のとがめぶる雲の稲　北枝
作りもとめし酒の歌あるは菊屋　支考
一雲の宮ちと茅の宮ちと刈
秋ぞ来ぬ始の一菊を麦の苗　惟然
百生ていくらもの花庵幸ヨ　水苔
大師河原を踏て桜咲ちらふ
ものく踏てたりて
その酒を西瓜と戸の菊の種　沾圃

菊草ハ菊ノ名又別ニ種アリ
藤目集ニ紀友則ノ歌ヤ
雪ちらぬ人ハあるとも名ハ
ヘぬ
玉牡丹ハ菊ノ一種ノ名ナリ
題屏　画ハ屏風ノ画讃ナリ
行騰　和名抄行旅具ニ行縢

菊

菊を二百ナルも多なり　芭蕉
ちらしてやちるは菊の色杜丹　酒堂
煮物の菊ちらしの菊の花　支考
歌屏
もりもりもりもりる山路の菊の露
ぬるかけし鹿の呼やもるの菊　凡兆
暮秋　丈艾
庵津や菊なる秋の菊
秋秋を鼓ちの菊の花ぬる　嘯水
秋秋やもりもりる菊のいり　乙刀
芭蕉

鮫ハ俗字カ

万葉三十五丁ハ笋ニアラズ仮名
笋枕詞ナリ　あれハ椿の葉ニアラズ
主馬名丹墅大津住ノ能太夫

雜秋

古今十ハ春ノ部ニテ鮫一ツ
葉ニアラズ　松ノ木ノ
ナリ　葉ノ堅ニシテ長ク枝ニ
鮫ノ如ク長ク出ル故ニ百
角ニアラズ　之道　雷友　暁止　四友　蔡子　翁　万年　柿ノ葉ニ似タリ　葉ノ字誤

本馬ニアラズ　宝ニ鮫骨ナリ　笛鼓
ヲ打チテ能ヲ舞ヒ謡ヲ歌フ
ノ能ニ用ヒラル　柿ノ葉ニ似タリ

蓮子至樂篇ニ撥髑髏枕而臥
ト云ヘリ

東坡カ九想ノ図ヲ思フベシ

ナレハ　ヨカレ
ナレハ希求ス

なにはえの芦のかりねの一夜ゆへ
髑髏を枕として臥す夢うつつ
をとこ山　をとこ女　をとこ
めをとこ　めをとこ

稲雀や新の穂の芦の穂　芭蕉

冬之部

時雨附霜

この比の時雨の結目や竹の節　北坡
ちるれ紅葉の口紅に　小枝
ふみ人もうしなれ　芭蕉

クツルヘ
顏

楚王聞鏡中雨

一時自又ちきくの新ル
汐時自水流の芋の葉の滅
平押よ五反田ちる上雨ル
雪景やりく時自の愛山ち
梶雪も出よ光野の初時雨
空然の出てハ引込時自ル
文る萩や続よちる一ちル
石る雪て雪梶をぬふ代時自ル
柿自むの初もち一やもふ時自
高ちち時自て里ハ雪時分

沈園
和鯤
支考

沖典風ノ名ナリ

原本辛酉ハ誤リテ禄四辛未
同六年癸酉ナリ勾選年考ニ元
禄六年トイフ

東坡侍ノ題ニ菊花開時則重陽ト
展リ　大賢ノ御代重陽延喜
帝ノ御因忌ニ當セ玉フヨリ十月
殘菊ノ安ヲ行セ玉フ

日新ちちちの自ちち代
沖典の新ちち代時自ル
初ニ雪や大のちのく風の　沖
ちちち菊や一菊くのちの雪
元禄辛酉ちく初冬九日素堂
菊園ちく
辛酉の雪ちち神冬自の雪ちち
けれる支ハちの代ハ若年ちく冬ち
もやちく菊ちちち　ル　文潮と
ちるちちちちちちハ張重陽の自
ちく一ちちちちちち紅ハちち秋

躅ミチリ

柴桑ハ潯陽縣ニテ陶淵明カ隱栖ノ地ナリ

菊を存して人くをそなへける

菊の色や花の姿や菊の養　芭蕉

柳の色や花ちるころの菊の一奇　甚角

菊の菊供物の香や煙や義の中　椒隣

小雪の白や花ちるころ菊の霜　沾圓

行色の香そしらん菊の枝　岑良

菊畠ありも圓ちるかりけり　馬莧

業事の隱士無絃の琴を調ととのへ

おのれ菊も鞠の花ちるを

ゆくちるり法花もちるを及ちる

竹洞老人名節一守友元林道春門人ナリ

今年の菊とまれのておもてのうつ

ちるを惜ちとくにせ菊の

りて琴をしかけるなりまや

ちて人見休園の人素琴を送

れしうつ年秋なりは

してなるは鈴ちるよ碁なる人

風ちるちくなりてうつるを

うつ　ちぬ琴や作ぬ菊の友　素堂

菊附句

水仙や孤城ふれしうつ送ちる　如雲

ちる清く美や美しの水仙　沾圓

チャウナン
長男ニテ趙南ハ書損ナリ史記
趙世家ニ出
山家集抜ヤ〳〵命となる今
うれすしのこゝろよさもてうるち

水仙の葉のみどりに義房〳〵ぞ　惟然

花鬘ちやく〳〵ちんのこゝろもとる

山茶花の歌ゑ

一雨もうるさぬ葉の水ゑん　苔蓬
山茶花に天てう咲くく咲り也　東庸
冬梅の咲ちらやうやるの春　土芳
山茶花も苔てやちの数梅　嵐雪

木葉　附冬枯　風

おもひ出て本の葉ちく散やまる風　沾德
星ちらて江の鮒ひゝむ義葉ゑ　春居
冬川や本の葉ハ黒き岩の色　惟然

牛ハ順風ヲ恐レ逆風ヲ悦ブトヽ

梅養うり是さらぬ本の葉ゑん　松風

東松坊宇治の寓を訪て

ちひさうり出れて尽る蔓葉ゑ　一道
松ちく雪ちちちや如郎也　杉風
牛の行ハ松ぬのちゝの沈　松破
冬松ちち年ちてゑくちなし　乃詩
冬松ゑまうてちく暗ちり　利牛
呼ハ松てのちゑ石なし霧の首　支考
風やちゑも尺ゑ数ちもん　紹白
木枯や野牛ちく牛の秀　風外
ここのゝ　や刈田の田の秋葉ゑ　惟然

曲礼注家鴨為鶩

中古霰ノ字用ヒ来ルハ誤カ。

本草や蒙求などに牛の角　麈尾

麦縫　砧　麦ぬかの袋　苣蕪

文選注海鶩も鴨なり　利合

鳥附魚

のどの海苔　海苔　浦　海苔　匂宮

麈尾　海苔　海苔　苔蘚

追ひけて　海苔　海苔　丈草

小松の多摩川の松　屋形

八海や　海の蟹　海苔　雪松

蟹　つくづくめ　鴨の足　苔蘚

玄　按ハ偽字ハ把也

海月文選注大如鏡白色正圓

又海鏡トモ書リ

海父魚ニモ作ル状如沙魚

玄　本草　三人

杓沙　こうれ　提　こうれ　利雪

こうこうと海月こうこうと海月　車庸

又又もくもくと杉ばえの苔水　密水

一塊よ初日魚や雲の寄　杉苔

かくしつや　鮭を煮ふて降り霰　熱燗

杜父魚ハ河豚の大きなるを出す

こうふ越の川まで降る魚こ

冬月附食

食わや門麦降く冬の月　黒蜆

降ふ梅のかけ出て寒や冬の月　丈草

五元集自筆ニ門ヲ閉ちるトアリ
ちろハ書損カ又一直ニヤ
朝辺ナリ
むしれをへすゝゝゝ雪の事ナリ

何ゝも春大きもゝ弐ゝ雪ゝ　山吉
水仙や門を出れハ江の月夜　支考
埋火
埋火や墨ゝ筆のかけゝゝ　甘蔗
炉ゝ　ゝハ教をかけゝる文鳥　少年　桃先
自由ゝや月を追ひ出ゝゝ　沈木
雪
初雪や門を稲ひ夕ゝ　其角
鮒ゝゝや月ゝ雪ゝ酒の味　令
雪ゝゝれ世のかゝる雪を非　久葉
鮒鶴宗ゝゝゝゝゝれ雪　祇角

さ沙

雪地や高ゝゝゝ人ゝ雪のゝゝて　芭蕉
時ゝゝゝ雪ゝ雪ゝ雪ゝ雪の雪　支考
ゝ雪ゝ雪ゝ雪ゝ　かゝる　ゝゝ　園吟
世ゝ雪ゝの雪ゝ雪ゝ口枝の雪ゝ　丈艾
餐刑ハ降朱雪ゝ雪ゝの嶽　陽和
降雪大和雪ゝ　山や雪の雪　紀力
神楽
教子ゝゝ嶽ゝ食ゝの世雪ゝ雪　史邦
鮮ゝゝ
食ゝ兵ゝゝゝゝゝの鮮や　路子
鮮ゝゝ千鮭雪ゝ雪ゝ　馬光

濃紙ハ鳥子ノ下品ニテ帛名ヲ書キ
吉多々壁ノ幔幕ニ用フ
嘩字用来レトモ俗訓ナリ

幔ヲ行ス

踊入の門も五色の紙を
張を送りこの人数紙を
煤掃附餅搗

煤掃や蔵迄入れ搗の中
すくすくと竹ばかりなる野辺の
才蔵よ餅の如くに煤入れ
煤入れば白ふくれる紙ばかり
煤ぬぐや形変一枚脱くくく
餅搗や男を知らぬ男部屋
餅搗や竹ばかり美くる鄙の樹
もち搗の手伝ふ山伏

許六
沾圃
孤雲
里芳
閭如
怪然
徐水
嵐蓼
馬仲

袴ヲ奴ノ句炭俵ニ出ス再入七郎
集中其勇髪長帽子ノ句ト此句ノ三
羽織ヲ取ル

歳暮附餅搗 衣配

こ松の門の人数の市の賑
門松やきて出るの清の髪
寒石やとりて竹の清の
猿も来よ新しき年の
大年や取る袴のさ一筋
猿ぬぐ紙ひ年の
年の市袴ぬぐ紙
打くらを少しき市の
引むすぶ一粒紙や年の
桶の蝉のひらく新し年の

芋長
里東
芋士
車来
ら井
雪也
其角
四季
義子
猿路

敗布

濱萩ハ芦ニ云ヤウリ萩ヤ

柏堂呂丸元禄六年二月二日客死于京師

天鵝絨のさらふまうて年ゐる　物紙

濱萩ハ芦を結ぶてとりの巣

白ハ圖司呂丸の羽織ぶうの巣

のゐるとて好ものもすうて好

ゐ結ハとりの巣ゐるの巣ゐ

好ものとハ人ハ人ハ

盜人ハ巣ゐ萩ゐの年の巣　芭蕉

巣ゐるゐてゐんまの巣ゐの年忘　支考

衝ゐ巣ゐ出ゐ巣ゐ年の中　土芳

巣ゐゐハ弱ゐて好ゐ義の中　尚白

笹巣ゐの根ゐ成ゐゐ巣ゐ　ゐ年　椒淡

衣配　源氏玉ゐゐ巣ニアリ

民間ニハ奴婢ナトニあくゐる仕着ナリ

和名抄ニ組ノ一字ヲ用

織屋ハまのるゐゐ

一ゐるゐ巣ゐ巣ゐ　保抜の鶏　山椒

雜考　利給

小屏風ゐ巣を結ゐる巣ゐ　斜萩

椎竹ゐ根巣ゐ　尾の端　土芳

井の水の巣ゐる巣ゐ　巣下

巣ゐ巣ゐ山伏村の出つゝ　仙杖

巣結ゐのゐ巣ゐ　吐口　圓仙

出結ゐ巣ゐ巣ゐ　巣芝

山陰や猿ゐ屋根　冬日　白

独板ゐ人巣の根の巣ゐ　江谷

沾圓

灌仏や教を今すこし再案の吟なり　涅槃会ハ書損か猶ハ義楚六帖ハ釈氏住雲不可書飼者なりとなり

釈迦ハ浄飯王子提婆達多ハ斛飯王子ニテ尤従才なり

釋刈や[illegible]の[illegible]　杉風

釋教之部　附追善　哀傷

涅槃

涅槃像あき表具も見[illegible]　沾圃

[illegible]　芭蕉

山[illegible]　不撤

[illegible]像　山桜

灌仏

灌仏や[illegible]井戸の石柱　曲翠

[illegible]仏生れて二三日　石丸

灌仏や釋迦達婆ハ浴すし　之乃

元禄七年甲戌より

兄

魂祭

吟[illegible]　[illegible]

[illegible]　玄来

山伏や坊主[illegible]魂祭　沾圃

甲戌の夏大津より伊[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

宗ハ[illegible]の墓[illegible]　芭蕉

悼少年

[illegible]　性然

世寺ニ大刑ニ着シ時ノ表革ヲ今存セリ

オメイフ
法華講ヲ修シ所命講ニ作ル

臘月ノ釈尊今暁明星ヲ見テ成道シ玉シ日ナリ

大師講十月廿四日大師宗祖智者大師ノ忌日ナリ

その紅をちるよりはなれの尾　支考
かなくろの陸口ちよ語て
首の紙八福寿の寄る所ろ　本鉢
蓼原や福寿の寄る所ろ　支梁
清新諸
柳ゝ柿ゝ拝殿ゝ清新諸　沾圃
臘八
勝とゝゝゝゝれハ納ゝ所ゝ　許六
ゆのゆれかのあれゝハ大師諸　如行
雑題
法華の苦如堂ゝゝゝゝ

去来抄ニ再改て今の句ニなる
涼しさのトアリ

仏在世釈迦佛ノ在ニ世ニ云

夏念仏　夏籠ノ日課ヲ云

食堂　庫裏ニ云

如来開悟の時
涼しさの如来ゝゝゝゝ仏ゝ　去来
ゝゝゝゝゝゝゝゝ二本ゝゝゝゝ　智月
ゝ畑や敬ゝゝゝゝて仏ゝ世　乙刀
ゝゝゝゝの川城ゝゝゝゝ二諸　京窓
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ夏念仏　理坡
食堂ゝゝゝゝゝゝゝゝ　支考

旅ゝ部
送別
元禄七年ゝの夏ゝ世ゝゝゝゝ

韻塞柊の花のかゞみも俤よ
本名の旅うき人の旅かもなく
本名の俤旅人の心に共三句を書損
カ愚安畧ス

詩魏風碩鼠し無食我黍
三歳貫女莫我肯顧逝将去
女適彼樂土○輔
伊達郡常陸下向より江戸を出る
時送りの人まとアリ

身延山久遠寺ハ日蓮宗本山ナリ

大井川
麦ぬかの俤に成ぬ
おるゝや杵根ぬかの坂の上　箱根
許らの本名ぬかもむ時　性然
旅人のくらるゝ程うも　芭蕉

箱根
海の性然り空うゝ高く吹る時
嵐とも出るの芽をゝ〜ら　丈芝
鮎つるの白魚　送る別れ哉　芭蕉

甲斐の国延上ル時宿の
山辺をかくして

本海ハ空澤の如き苔の細ク
アリ
山家集すゝこの山海をとゝこふ
うすくいくよ苔の香ゆ
ゆるらん
更もなくハ重なもなくすり

谷地ハ溪間ノ荒地ヲ云
公羽ノ名マ、翁ニ勝ル
十國ヲ往古ハ常ノ國ノ大半ヲ
三田ヲリ翁曰此句主ヲ〆アリト

湯セヌヲリ

年ゝうて年ゝ年ゝうゝ苔のうゝ　本名
稲妻や浮世をとゝる終庵山　哉人
ゆゝるゝ苔ついゝう柳や旅の宿　壁経
出羽の国ふおもむくゝ対ゝう所ゝの
さゝひゝゝゝて
ゝゝかみハ谷地ゝゝ今し小松原　公羽
十寸ゝゝ小松ゝゝゝ鶴ゝ鶴ゝ　許ゝ
大石の苔ゝゝゝ苔ゝゝ旅ゝゝ　今〜
然野路
くゝ〜ゝゝ苔ゝゝかゝゝ冬の旅　苔良
燕ハ出てゝゝ〜ゝ事ゝ旅ゝうれ　素雄

西行上人ニ見ノ浦ニテ弱ヲ文臺トニテ詠歌ニモヒシ古事ニヨレルカ

足洗村ハ水戸ヨリ名古曽ニ至ル間ニアリ

四月十五日ニヤ此日鶴ヲ祝フ和漢ニアリ

三年ハ四年 書損ナルベシ
元禄三年ハ膳所ニテ越年シ玉ヒ
初夏ヨリ石山幻住庵ニ住玉ヒ
又湖南無名庵京師ニ留状シ又
粟津ニモトリ同四年ノ初冬武
江ニトリ玉フ
塚本孫兵衛名如舟ト云
泊船集ハシテ宿トリトシ作ルカ
ハ誤
甘蕉談曰先師迁化の年甲賀
の連衆此国まで一集なき八殘
念なる頃なりされ一時諸
終ひ〳〵と発俳に月迄三成歟
一鉢り一句後ヨ三百ヨ発ア書
巻くたつることたくるなり
小集ヨてる出さて出ト云云

續猿蓑ハ撰集半ニ有辻化ノ玉ヘリ過半後人ノ窟入キリ　オヨリ草稿ノ書ニハ〻書損見エ手跡蓮ニ坊ナヘニ不猫蛇ニ翁ノ自撰ト云ハ片腹ノくきさりと云ヒトリノ返若ノ削ホニ又考曰翁窟撰ホモ去来丈草ヨ行さりと云ハ大ナル偽ニ三十九ヘニ

隆樣蓑ハ
[illegible]の一流の書ハ人の撰
[illegible]
[illegible]
[illegible]